

ISSN 2187-9982

宇都宮大学  
留学生教育研究論集  
第6号

留学生・国際交流センター一年報  
2014年度

2015年7月

宇都宮大学留学生・国際交流センター

Center for International Exchange  
Utsunomiya University

# 目次

## センター長挨拶

留学生・国際交流センター長 横田 信三 .....	1
---------------------------	---

## 留学生教育研究論集 第6号

### <研究論文>

拡張的「ところヲ」構文の他動性 —いわゆる慣用的「決まり文句」型を中心に— 上海海事大学外国語学院 謝 新平 .....	3
宇都宮大学留学生教育研究論集 執筆要領 .....	11

## 留学生・国際交流センター年報 2014年度

### I 留学生・国際交流センターの概要

1 沿革・使命 .....	15
2 組織 .....	16
3 年間行事 .....	16

### II 留学生・国際交流センターの活動

1 教育・授業 .....	21
1.1 留学生・国際交流センター開講授業 .....	21
(1)初級日本語補講 .....	21
(2)中級日本語短期留学プログラム .....	21
(3)中級日本語補講 .....	25
(4)実践日本語 .....	26
(5)学部1年生日本語補講 .....	26
(6)日本語以外の関連科目 .....	27
1.2 基盤教育および学部・大学院での授業 .....	27
(1)日本語科目 .....	27
(2)日本語以外の授業科目 .....	28
1.3 留学生プログラム .....	30
(1)日韓共同理工系学部留学生予備教育 .....	30
(2)日本語・日本文化研修留学生プログラム .....	31
1.4 英語関連科目 .....	33
2 相談体制・生活支援 .....	36
2.1 基本的認識 .....	36
2.2 相談体制 .....	36
2.3 相談実績 .....	37
2.4 支援活動 .....	38
2.5 各種オリエンテーション .....	38
2.6 外国人留学生見学旅行 .....	40
2.7 外国人留学生スキー研修会 .....	41

3	留学生交流支援	43
3.1	栃木県地域留学生交流推進協議会	43
3.2	交流支援事業	44
3.3	ホームステイ事業	45
3.4	小・中・高等学校での国際交流	45
4	留学生の獲得施策	46
4.1	日本留学フェア	46
4.2	外国人学生のための進学説明会	47
4.3	交換留学生のための大学院進学説明会	48
4.4	海外同窓会	49
5	日本人学生の海外派遣留学の推進・支援	51
5.1	海外留学説明会	51
5.2	海外留学体験報告会	52
5.3	国際インターンシップ	52
5.4	海外渡航前危機管理オリエンテーション	54
6	各種協議会等への参加	55
6.1	日韓共同理工系学部留学生事業協議会	55
6.2	平成26年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議	55
6.3	全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議	56
6.4	国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会	57
Ⅲ	教員個人活動実績	
	横田 信三	61
	梅木由美子	66
	吉田 一彦	68
	戚 傑	71
	鎌田美千子	75
	湯本 浩之	79
Ⅳ	資 料	
1	留学生在籍状況	85
2	国際交流締結校との受け入れ・派遣状況一覧	86
3	留学生・国際交流センターの発行物	89

## <センター長挨拶>



留学生・国際交流センター長 横田 信三

宇都宮大学「留学生教育研究論集第6号・留学生・国際交流センター年報2014年度」が完成しましたので、お届けいたします。今年度は、宇都宮大学の国際交流を推進する、次に挙げる大きな出来事がありました。

大学が主催する英語研修が、8月30日から9月23日まで米国・南イリノイ大学で、そして9月14日から28日までオーストラリア・サザンクロス大学で実施され、それぞれ19名及び20名の学生が参加しました。センターは、準備段階から当研修をサポート致しました。

昨年度に引き続き、9月末に農学部教員と大学院生が米国パデュー大学を訪問し、また、2015年3月8日から3月12日まで、パデュー大学の教員2名が来訪し、ワークスタディを実施致しました。このように、本学とパデュー大学との学術交流が順調に進展しています。

12月17日には、インドネシア・ガジャマダ大学との大学間交流協定が締結されました。調印式は、ガジャマダ大学で挙行され、私も進村学長に同行して出席致しました。また、調印式後、ボゴール農科大学を表敬訪問致しました。両大学の訪問の際、同窓生との会合も行い、インドネシア留学生同窓会の充実に努めてきました。

今年度は、アフリカとの国際交流に関わる出来事もありました。2015年1月23日に、駐日ガーナ共和国大使が来学され、農学部修士課程のJICA・ABEイニシアティブに関する協議を行いました。これに関係して、現在、ガーナ大学との部局間交流締結を進めているところです。また、2015年3月9日に、エリトリア国大使及びエチオピア連邦民主共和国大使が来学され、寄生雑草に関する情報を本学教員が提供致しました。今後、アフリカの大学との交流が進展して行くことが期待されます。

上記以外にも、様々な事業をセンターとして実施致しました。本教育研究論集・年報を御覧頂き、当センターの日頃の取組や活動を御理解頂ければ幸甚です。

2015年3月 吉日



宇都宮大学  
留学生教育研究論集  
第6号



# 拡張的「ところヲ」構文の他動性

## —いわゆる慣用的「決まり文句」型を中心に—

上海海事大学外国語学院

謝 新平

### <キーワード>

他動性 ヲ格 連続性 省略現象 認知プロセス

### 1. はじめに

動詞と「ヲ」格との意味と形式が不整合な「ところヲ」構文に関する研究には、許斐（1993）、杉本（1994）、黒田（1999b）等がある。これらは、例文（1）と例文（2）のように多様な「ところヲ」構文を明確に分類せず一括して論じている。例文（1）のようないわゆる「決まり文句」に関しては許斐（1993）、杉本（1994）の言及と議論があり、謝（2003、2009b）<sup>1</sup>の分類と議論があったが、必ずしも十分とは言えない。

本研究は、これらを例文（2）の典型的「ところヲ」構文「停止・救助・攻撃・捕捉」類（ここではI類にする）の拡張的他動構文とみなし、新たに下位分類できる「決まり文句」類の意味的、形式的他動性を引き続き考察する（ここでは引き続きIV類（決まり文句）とする）。（下線—は「ところヲ名詞句」を表示し、例文中の括弧〔 〕は補える語を表示する。）

(1) お忙しいところヲお足をお運びいただきましてまことに有難うございます。

IV類 拡張的（決まり文句型）

(2) 警察はその泥棒が逃げていくところヲ捕まえた。

I類 典型的（「停止・救助・攻撃・捕捉」類）

### 2. 先行研究及び問題点と本研究の課題

#### 2.1 副詞句説

許斐（1993）は、「ところヲ」補文<sup>2</sup>の意味合いは動詞の目的語から副詞句としての色彩の濃いものまで多岐に亘ると述べ、例文（3）は副詞的性質があり、動詞の直接目的語と見做していない。類例として、例文（4）を挙げ、「一文一格の原理」の観点から、動詞が対応しているのは「八木山峠を」で、目的語であるとしている。「雨の降る中ヲ」は対応する動詞がないので副詞句である。つまり、同じ役割を果たす格の重なりがあり得ないという。

(3) お嬢さん、お帰りのところヲ恐縮ですが、ほんの少々我々にお付き合いいただけませんか。

<sup>1</sup> 2009年度九州大学に提出した博士論文で未刊行である。初めて四分類し：I類「発見」タイプの他動詞と共起する類（例：先生は太郎がカンニングしているところヲ見つけた。）II類「停止・救助・攻撃・捕捉」タイプ他動詞と共起する類（例：警察は泥棒が逃げて行くところヲ捉まえた。）III類自動詞（受動詞、受動態）と共起する類（例：その泥棒が逃げて行くところヲ警察に捕まった。彼はぐっすり寝入ったところヲいきなり頭を殴られた。）IV類「決まり文句」類と、「逆接」類で副詞句と見做されている類（例：お忙しいところヲお足をお運びいただきましてまことに有難うございます。太郎が疲れきって帰宅したばかりのところヲ大勢の生徒が押しかけた。）

<sup>2</sup> 警察は〔主文主語〕〔その泥棒が〕〔補文主語〕逃げていく〔補文述語〕ところヲ 捕まえた〔主文述語〕。所謂「ところヲ」構文には主文と補文二つの文があり、「ところ」で名詞化した補文と主文主語・述語との文法的関係は議論の争点である。多くの先行研究での議論を通じてよく知られている引用例文は特に出典を明記しない。収集例文の出典と先行研究からの引用は明記する。

(4) 彼女は雨の降る中ヲ八木山峠を超えて行った。

杉本(1994)は、例文(1)を副詞節とし、「ところヲ」句は通常文頭に置かれる「決まり文句」である、としている。また、その理由として、次のように副詞句を「を分裂文」に変形できないためである、と指摘した。言い換えれば、「ヲ」格名詞句に対応する動詞が文中述語ではない、ということである。

(1)' <sup>3</sup> お足をお運びいただいたのは、お忙しいところ(ヲ)だった。

## 2.2 他動的構文説

謝(2003、2009b)では、変形という位置の移動だけを鍵に解釈することと、形式上だけの「一文一格の原理」の考えより、全ての成分は元々その位置に置かれるべきものであるとする。そして形式よりも構文の意味解釈の解明のほうが大切であると考え、「決まり文句」型「ところヲ」構文を拡張的他動性のある構文としている。

具体的には例文(5)、例文(6)のように、共起すべき動詞[配慮せず]、[考えず]が省略されており、文全体または表層に出ている後の述語部と連動することで、この状況を停止させ、無視し、考えなかったことにする意味合いがあると解釈できる。文全体は意味的には他動性があると考えている。

また形態的特徴として、「ところ」を修飾する補文述語に形容詞が多いことが挙げられる。場合によっては、意志を表す程度副詞「無理、思い切って」などが述語の前に来ることもある。意味的には「ところヲ」が表しているのは「特殊で好ましくない」状況である。

(5) その調子は忙しいところを[配慮せず]暇を潰(つぶ)させて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がいらなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。(夏目漱石『こころ』)<sup>4</sup>

(6) 少し柄がいいので、手元の苦しいところを[考えず]思い切って契約してみると…。(徳田秋声『縮図』)

## 2.3 本研究の課題

以上のように、先行研究では意見が分かれている。その他にも残された課題がある。例えば、①「ところヲ」補文が必ずしも文頭に来ない場合もよくあること、②「ところヲ」の表す状況は「好ましくない状況」が多いが、しかしこれらを「特殊で」という意味で片付けて良いのかという疑問、③他動性の性質が具体的にどのようなものか、等で、まだ議論の余地がある。

本研究は、補文主語と述語及び状況の特徴、その相互関係から「決まり文句」類の形態的意味的他動性を再考する。次節ではまず補文主語の特徴を検討する。

## 3. 補文主語—表層の存在と省略

杉本(1994)は、多くの場合「ところヲ」句が文頭に来ることが語順の特徴であることを指摘している。しかし、次の例文のように、「ところヲ」名詞句が文中に現れ、通常の構文語順に類似している場合もある。また、「ところヲ」名詞句の前に来る補文主語は省略されることもある。例文(3)のように補分主語が表層に存在したり、例文(1)のように述語の形態から予測できたり、例文(7)のように文脈から容易に予測できたりし、実質的に存在している。

<sup>3</sup> 非文の印である。

<sup>4</sup> 本研究での例文は、先行研究と関連付けられている場合はその研究の出典からの引用であり、そうでない場合は、作者の収集作品からの引用である。

(7) (= (5)) その調子は[あの人が自分が]忙しいところを暇を潰(つぶ)させて気の毒だというよりも、せっかく来たのに泥棒がはいらなくて気の毒だという冗談のように聞こえた。(夏目漱石『こころ』)

補文構造の特徴を表1にまとめる。

表1：補文構造の特徴

お嬢さん [主語]	ガ格 [無助詞]	お帰り [述語]	(表層の存在)
お (接頭辞) [主語]	ガ格 [無助詞]	忙しい [述語]	(待遇表現による構造)
(あの人が) [主語省略]	ガ格 [無助詞]	忙しい [述語]	(省略)

#### 4. 補文述語—形容詞、形容動詞、名詞、動詞 [主観的、時間的]

謝(2003)では、補文述語は「特殊、好ましくない」状況を表し、形容詞と形容詞性質がある詞<sup>5</sup>であるとされた。しかし、補文述語の形態的意味的特徴は状況に後続する動詞との関連性と、文の成立の可否(例文：\*警察は太郎が花子に似ているところヲ捕まえた。補文述語が「似ている」の場合は非文になる。)に関わる問題であり、より細かく分析する必要がある。

まず、収集例文の例文(8)～(11)のように、形態的には、形容詞、形容動詞、名詞、動詞があることがわかる。また意味的には、心情を表す感情的なもの、時間的状況・状態を表すもの、人間の判断を表すもの、に分類される。つまり述語の意味合いは「主観的感情、主観的判断、時間(時間的状況・状態)と大きく分けられる。中には時間的と主観的感情の両義性を持つものもあり、「ところ」を修飾した場合は例文(2)のように状態から時間に変ったりもする。形態的意味的特徴を表2にまとめる。

また、本研究では補文述語の「主観性と客観性」が文の成立に関わることを初めて明らかにした。非文例文：「警察は太郎が花子に似ているところヲ捕まえた。」も述語補文が同じ状態を表すが、「決まり文句」型「ところヲ」構文の場合は形容詞が主語の主観的判断を表す。それに対して、非文例文の場合は、「似ている」は静的客観的性質・性状を表す。(例文：\*警察は太郎が花子に似ているところヲ捕まえた。)したがって、補文述語の主観性がすべての「ところヲ」構文の成立可否に関わると言っている。

- (8) 「ええと、前略、先刻は遠路のところをわざわざご苦労さまにそろ。……」(佐々木味津三『右門捕物帖(一)』)
- (9) 「こちらでも、糸子さんやら、一(はじめ)さんやらで、御心配のところを、こんな余計な話を申し上げて、……」(夏目漱石『虞美人草』)
- (10) 「……寒いところを御苦労だが、なにぶん頼むよ」……。 (岡本綺堂『半七捕物帳 <一>』)
- (11) それで由雄さんが病気のところを無理に來まして、……。 (夏目漱石『明暗』)

表2：補文述語の形態的意味的特徴

補文述語	主観的感情(状態)	主観的判断(状態)	時間(的状況・状態)
形容詞の名詞	お楽しみ 病気 間一髪	病気 遠路	間一髪
形容詞	忙しい 苦しい 危ない 寒い	遠い 近い 暗い	忙しい
形容動詞	御心配 ご多忙		ご多忙
動詞	お疲れ		お休み中 お帰り

<sup>5</sup> 先行研究では形容詞の意味・機能による分類があるが、ここでは形容詞の意味的特徴(事物の性質の描写・評価、感情の表出等)を持つ語を形容詞性質がある詞としている。

## 5. 主文動詞述語－「ヲ」補文に後続、補充可能

「ところヲ」構文の最大の課題は、「ヲ」格を伴う補文と後続する動詞との、意味と形式の不一致である。I類「停止・救助・攻撃・捕捉」類（例文（12））に関して、補文「ヲ」格と後続する動詞との整合性について幾つかの提案<sup>6</sup>がある。本研究では、引き続き、IV類「決まり文句」型構文でも動詞の省略が行われ、人間の認知プロセスによって補うことができると考える。つまり、文中には「省略」現象が起きていると考え、「決まり文句」型はI類「停止・救助・攻撃・捕捉」類と類似するものと見做し、論を進める。

I類「停止・救助・攻撃・捕捉」類

(12) (= (2)) 警察はその泥棒が逃げていくところ（瞬間）を〔掴んで〕〔その泥棒を〕捕まえた。

### 5.1 言語省略現象による動詞の省略

省略動機と省略可能条件

言語の省略現象、および、文法の形式と意味の不一致現象について、謝（2009a、2009b）等で日中対照の観点からその普遍性を論じた。また、野田（2001）が指摘したように、省略の種類には文レベル、成分レベル、実質的要素、機能的要素の各省略があり、小池（2002）が論じたように周知の日本語「うなぎ文」でも動詞が省略されている。謝（2003、2009a）等が日本語の「中ヲ」状況文と「ところヲ」構文は「うなぎ文」に類似し、動詞の省略現象であると論じている。また認知的視点から、形式目的語と隠れたもう一つの目的語とはメトニミー的關係にあり、人間の隣接関係にある事物への認知が働いていると見ている。この用法の使用動機と機能は、文意に含みを持たせて表現を豊かにすることである。さらに表現の経済性も考えられる。

(13) ぼくはうなぎ。

(13) a ぼくはうなぎを注文する。

(13) b ぼくはうなぎを食べる。 小池（2002）

(13) c ぼくはうなぎが好きです。

(14) (中) 吃大碗。吃 [v他動詞] 一大碗 [O目的語]

(15) (日) 直訳：ドンブリを食べる。ドンブリ [O目的語] 一食べる [v他動詞]

意識：ドンブリを平らげる。ドンブリの中に盛り合わせたご飯を食べる。

(16) (中) 吃食堂。吃 [v他動詞] 一食堂 [O目的語]

(17) (日) 直訳：食堂を食べる。意識：食堂でご飯を食べる。食堂のご飯を食べる。 謝（2003、2009a）

例文（14）は「ドンブリ」「大碗」と「ご飯」「飯」との関係、例文（16）の「食堂」「食堂」と「ご飯」「飯」との関係は次のように隣接性のあるメトニミー的關係にある。表現語と省略語には何らかの意味的関連性がある。また、例文（16）のように背景知識によって多義的に解釈できる。

例文（14）の場合：[容器－中身] [大碗－飯] [ドンブリ－ご飯]

例文（16）の場合：「場所－製作物」或いは「機関－製作物」 [食堂－飯] [食堂－ご飯]

謝（2003、2009b）では同じ省略現象が「決まり文句」型構文で行われていることを述べたが、本研究では新たに、補文主語と補文述語が表す事態との間にメトニミー的關係<sup>7</sup>があり、補文表現には〈全体－部分〉〈部分－全体〉の近接性の認知モデルが反映していることを明確にしたい。例文（3）のように補文主語と「ところヲ」名詞句が表す「主観的感情、主観的判断状況、時間・時間的狀況」は〈全体－部分〉〈人－時間〉の接

<sup>6</sup>「ところヲ」補文を主要部内在型関係に類似する黒田（1999a）、形式上の対応を重視する許斐（1994）、意味を重視する研究杉本（1994）などがある。

<sup>7</sup>山梨（1995）のpp.19 - 45を参照。



近性関係 (図1 (a)) があり、例文 (1) (5) の場合には〈部分—全体〉〈人—状態〉の接近性関係 (図1 (b)) がある。



以上のように、人間の認知可能の観点から、省略現象の動機はより経済的、より創造的になること、および、「決まり文句」型「ところヲ」構文の省略可能条件は、補文主語と補文述語の表す状況との関係性に隣接性に基づく認知モデルが反映していることがわかった。

## 5.2 省略動詞の形態的意味的他動性

収集資料から、補充可能な動詞の形態は次例文の角括弧内のように、心の動きを表す心理他動詞であることがわかる。心理他動詞の語彙的意味である「主観的感情」「主観的状况」を配慮しないという意味合いがある。また、「邪魔する」は心理的動きだけではなく、「時間」の流れ、状態を中止させ、事態の過程を止め、無理に押し進めるという意味合いもある。

補える動詞：配慮する、考える、無理する、構う／気を使う、邪魔する

- (18) (= (8) 「ええと、前略、先刻は遠路のところを [無理して] わざわざ [お越しいただいたのは] ご苦労さまにそろ。…… (省略) (佐々木味津三『右門捕物帖 (一)』))
- (19) (= (9) 「こちらでも、糸子さんやら、一 (はじめ) さんやらで、御心配のところを [配慮せず]、こんな余計な話を申し上げて、…… (省略) (夏目漱石『虞美人草』))
- (20) (= (10) 「……寒いところを [気にせず] 御苦労だが、なにぶん頼むよ」…… (省略) (岡本綺堂『半七捕物帳 <一>』))
- (21) (= (11) 「じゃその変なところを云ってちょうだいな、いくらでも説明するから」それで由雄さんが病気のところを [考えず] 無理に来まして、…… (省略) (夏目漱石『明暗』))

「ところヲ」構文の動詞の省略言語現象には背景と前景の認識のモデル<sup>8</sup>が投影されていると言える。つまり図2のように、心理動詞が背景になり、「ところヲ」名詞句に焦点を当てることで前景として認知していくことで「ところヲ」部分が際立つことになる。話し手あるいは動作主には、前景化焦点化の状況事実がわかっている。それにも拘わらず行動を起こす。行動の実行が事象成立の前提になっている。

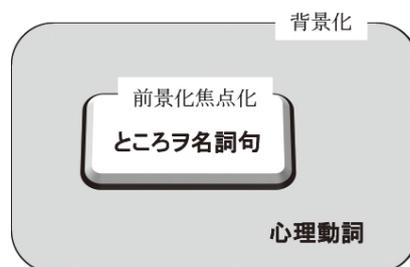


図2：前景・背景モデルの投影図

<sup>8</sup> 山梨 (1995) の pp.11 - 18 「ルビンの盃」

## 6. 拡張的「ところヲ」構文の他動性の強弱度

本節では認知言語学のプロトタイプ論観点からⅣ類の「決まり文句」構文の他動性の度合いを考察する。日本語の他動性の意味的形式的原型特徴<sup>9</sup>、すなわち、4つの意味的原型（i：何かを行う行為者がいる、ii：行為を被る対象がいる、iii：その対象が被る行為・変化は、行為者によって引き起こされる、iv：行為者がその行為を意図的に行い、コントロールでき、一番責任がある）と、二つの形式的原型（v：「ヲ」格の使用 vi：他動詞の使用）に基づき、「決まり文句」型の他動性度合いを検討すると、他動性の強弱を表3のように示すことができる。

第1に、有情の行為者が文中に存在する。例文（22）は例文（23）のように行為者が表層には現れないが、話し手で主文主語であることがわかる。

- (22) (= (3)) [話者・主文主語] お嬢さん、お帰りのところヲ [配慮せず、邪魔する] 恐縮ですが、ほんの少々我々にお付き合いいただけませんか。
- (23) (= (1)) [話者・主文主語] お忙しいところヲ [配慮せず、邪魔する] お足をお運びいただきましてまことに有難うございます。

表3 「決まり文句」型の意味的形式的他動性の強弱度

意味的他動性				形式的他動性		
行為者	行為の対象	行為者の働きかけ	対象の変化	行為者の意図性	ヲの有無	他動詞の有無
+	+	+	+ -	+ -	+	+ -

第2に、行為の対象である、補文 [お嬢さん、お帰りのところヲ] 「主観的感情、判断」状態、「時間的」瞬間、状態が文中に存在し、[お嬢さん、お帰り = 全体一部分] の関係にあることが第5節で確認された。

第3、第4に、行為者の働きかけと対象の変化が認知プロセスによって省略され、補充可能の心理動詞と停止型動詞をもって実現する。心理他動詞の場合は抽象的な働きかけであるが、対象を指示し、それに向かって働きかける方向性があることが第5節でわかる。心理的他動詞は、動作が対象に向かうが対象を変化させることがない。例文（22）（23）のように、停止させる意味合いのある動詞の場合は、「時間的」流れと状態を止めることが対象に変化をもたらすため、対象に変化を起こす意味合いを含む。

第5に、強い意志性を表す副詞と（例文（18）（21）のように「わざわざ」「無理」）、文表層に現れている意志性のある動詞（例文（22）「お付き合いいただけませんか」と例文（1）「お運びいただきまして」）によって行為者の意志性が表されている。

最後に、形式的他動性は、他動性記号「ヲ」格と心理他動詞、停止類他動詞を用いることで表される。

以上のように、動詞述語と文脈によって対象の変化と行為者の意志性がない場合もあるが、他動性の度合いは決して弱くはないことがわかる。

## 7. 結論

本研究では「決まり文句」型Ⅳ類「ところヲ」構文を動作動詞「停止・救助・攻撃・捕捉」Ⅰ類に類似した拡張的他動性構文と見て再考した。

まず、補文主語の意味的構文的特徴、補文述語の形態的意味的特徴について考察した。次に、主文動詞構文的特徴と他動性、及び補文主語補文述語との関係について考察し、「決まり文句」型が成立する動機と可能条

<sup>9</sup> 他動性について様々な先行研究があるが、先行研究を概観した上、形式と意味両側から六つの原型の特徴を提案した提案（謝（2009b））に従う。



件をまとめた。最後に、「決まり文句」型Ⅳ類「ところヲ」構文の意味的形式的他動性の強弱度合いを検討した。

本研究でまた新たに示した点は、(1) 補文主語と補文述語が表す事態との間に〈全体-部分〉のメトニミー的關係があり、人間の接近性の認知モデルが反映し、「決まり文句」型Ⅳ類「ところヲ」構文の省略現象の成立条件になっている点、(2) 「決まり文句」型Ⅳ類「ところヲ」構文の成立動機は、「ところヲ」名詞句に焦点を当てることで「ところヲ」部分が際立ち、省略心理動詞が背景になる点、(3) この言語現象には背景と前景の認知モデルが投影されている点、の3点である。

## 謝辞

本研究は2013～14年度上海海事大学人文科学研究費補助金研究「关于汉日自他被动使役非对称性研究」(課題番号：20130482)の研究成果の一部である。

## <参考文献>

- 天野みどり (2009) 「主要部内在型関係節と接続助詞的な‘ヲ’」『和光大学表現学部紀要』10
- 許斐慧二 (1993) 「「ところ」補文のシンタックス」『言語学からの眺望』福岡言語研究会編 九州大学出版会
- 黒田成幸 (1999a) 「主要内在関係節」『ことばの核と周縁 日本語と英語の間』くろしお出版
- 黒田成幸 (1999b) 「トコロ節」『ことばの核と周縁 日本語と英語の間』くろしお出版
- 小池清治 (2002) 「「私はキツネ。」に、留学生はなぜ驚いたのか?」『文法探究法』シリーズ2 小池清治、赤羽根義章著 朝倉書店
- 佐藤琢三 (1995) 「日本語のヴォイスの体系とプロトタイプ」『日本語と日本文学』21 筑波大学
- 謝 新平 (2003) 「「ところヲ」構文いわゆる副詞句類について」比較社会文化研究第14号
- 謝 新平 (2009a) 「「中+ヲ」状況構文の他動性再考」『福岡教育大学国語科研究論集』50号
- 謝 新平 (2009b) 「日中両語の他動性に関する研究 - いわゆる周辺問題を中心に - 」未刊行
- 謝 新平 (2010) 「ところヲ」構文の他動性について」『福岡教育大学国語科研究論集』52号
- 柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』11月号
- 杉本 武 (1994) 「警察はその泥棒が逃げていくところを捕まえた」再考」『九州工業大学情報工学部紀要』(人文・社会科学篇)7 九州工業大学
- 野田尚史 (2001) 「うなぎ文という幻想—省略と「だ」の新しい研究を目指して」『国文学解釈と教材の研究』46巻2号 学燈社
- 野村益寛 (2001) 「参照点構文としての主要内在型関係構文」『言語認知学論考』1 山梨正明・他編 ひつじ書房
- 初山洋介 (1989) 「現代日本語の「トコロ」の意味的、統語的、文体的特徴」『Litteratura』10 名古屋工業大学外国語教室
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- 吉村公宏 (2004) 『はじめての認知言語学』研究社

## <例文引用作品>

- 岡本綺堂『半七捕物帳 <一>』(光文社時代小説文庫)、光文社から「広重と河瀬」(1985)
- 佐々木味津三『右門捕物帖 (一)』春陽堂文庫、春陽堂書店から「卍のいれずみ」(1982)
- 徳田秋声『縮図』「現代日本文学館8 徳田秋声」文藝春秋 (1969)
- 夏目漱石『虞美人草』夏目漱石全集4、ちくま文庫、筑摩書房 (1988)
- 夏目漱石『明暗』夏目漱石全集9、ちくま文庫、筑摩書房 (1988)
- 夏目漱石『こころ』集英社文庫、集英社 (1991)

**On Transitivity of Extended TOKOROWO Constructions**  
**— Mainly focusing on their conventionalized expressions**  
**XIE Xinping**  
**(College of Foreign Languages, Shanghai Maritime University)**

Keywords: transitivity, WO case, continuity, ellipsis phenomenon, cognition process

We propose a new categorization of the TOKOROWO constructions that its associated verb does not match the meaning and form of the WO case and discuss on its features, forming conditions, and strength levels of its transitivity. Firstly, we distinguish conventionalized expressions of TOKOROWO constructions (cliché TOKOROWO) from typical TOKOROWO constructions and define that the former is an extended transitivity constructions of the latter. Secondly, we discuss features on the sematic structure of a complement subject and formal semantics of a complement predicate and show the conditions and motivations for consisting of the cliché TOKOROWO. Concretely speaking, it is consisted when a subject and a predicate in a complement clause have a metonymy relation of whole-part and are reflected by a cognition model of human proximity. The motivation of its use is that a TOKOTOWO part becomes a foreground by focusing on a TOKOROWO noun phrase and an omitted psychological verb phrase becomes a background. We may say that a cognitive model of foreground-background is reflexed to this linguistic phenomenon. Thirdly, we discuss the strength level of transitivity of the cliché TOKOROWO from the viewpoints of four semantic models and two formal models and show that its transitivity is not weak.

(2015年3月31日受稿、2015年6月17日受理)

---

(連絡先) 謝 新平 (上海海事大学外国語学院)

E-mail : xiexinping@hotmail.co.jp

## 宇都宮大学留学生教育研究論集 執筆要領

「宇都宮大学留学生教育研究論集（以下、「論集」とする）」に投稿しようとする者は、以下の「執筆要領」に従うものとする。

1. 投稿する研究論文・報告・研究ノート（以下、「論文等」とする）の判型は、A4版横書きとする。
2. 「論文等」に使用する言語は日本語あるいは英語とする。
3. 「論文等」の文字数および頁数は、1頁あたり全角40字×35行とし、15頁以内とする。ただし、本文のほか、表題、執筆者名、図表、脚注、参考・引用文献、要約などもすべてこの制限頁数以内におさめるものとする。
4. 「論文等」の書体（書体）および文字サイズは、以下の通りとする。
  - ①表題、執筆者名、見出し、図表等のタイトルは、ゴシック体とする。
  - ②そのほかの本文、脚注、参考・引用文献は明朝体とする。
  - ③脚注のフォントは、9ポイントとする。それ以外の部分のフォントは10.5ポイントとする。
5. 「論文等」の原稿は、以下の体裁を取る。
  - ①表題、執筆者名、キーワード（5語程度）、本文、参考・引用文献、要約の順に記述する。
  - ②表題および執筆者名のスペースとして、8行を確保すること。したがって、1頁目の本文の書き出しは9行目からとなる。
  - ③原則として、原稿の見出しに「章・節・項」は用いず、大見出しは「1. 2. 3. …（数字・ピリオドは全角）」、中見出しは「1.1 1.2 1.3 …（数字・ピリオドは半角）」、小見出しは「1.1.1 1.1.2 1.1.3…（数字・ピリオドは半角）」とする。なお、項目を並記する場合は「(1) (2) (3) …」とする。
  - ④句点は「、」、読点は「。」とする。
  - ⑤文体は「である調」とし、原則として常用漢字、新仮名づかいを用いる。英数字(アラビア数字)については、1桁は全角文字、2桁以上は半角文字を用いる。
  - ⑥表記を統一する。(例：「並びに／ならびに」「葉書／ハガキ」「コンピューター／コンピュータ」等)
  - ⑦図表は本文中に埋め込み、図および表には、それぞれ通し番号を表示する。
  - ⑧注釈は脚注とし、該当箇所の右肩に括弧なしの洋数字(123…)で通し番号を表示する。
  - ⑨参考・引用文献の書誌情報については、本文中に引用箇所を明示した上で、原稿末尾に著者名、発表年、書名・題名、巻・号、ページ、発行所を明記する。
  - ⑩ウェブサイトから引用する際には、作成者、URL、参照年月日を明示する。
  - ⑪要約は以下の要領で作成する。

和文の場合：英語の表題、ローマ字著者名、英文要約(300語以内)、英語キーワード(5語程度)  
英文の場合：日本語の表題、日本語著者名、和文要約(800字以内)、日本語キーワード(5語程度)
  - ⑫原稿には通し番号を記す。
6. 査読の公正さを期するために、以下のことに留意する。
  - ①「研究論文」の中には「拙稿」や「拙著」など、投稿者名が判明するような表現、または指導教員や研究協力者などに対する謝辞を避ける。ただし、謝辞については、査読後の編集段階で追記を認める場合がある。
  - ②「研究論文」の投稿原稿には、所属および執筆者名を記載しない。

以上



留学生・国際交流センター年報  
2014年度



# I 留学生・国際交流センターの概要





## 1 沿革・使命

宇都宮大学の留学生数は平成元（1989）年には69名だったが、その後日本政府の「留学生10万人計画」に則り年々増え続け、平成26（2014）年10月現在では、世界30カ国から282名の留学生が学んでいる。

「留学生・国際交流センター」（以下、センターという）は、当初外国人留学生に対し、必要な日本語・日本事情教育および修学・生活上の指導助言を行うとともに、留学生と地域との交流の推進や海外留学を希望する学生に対する指導助言を行うことを目的として、平成14（2002）年4月に「留学生センター」として設置された。

その後、平成24（2012）年4月にセンターへ改組し、それまでの「日本語教育運営部門」と「留学生指導・相談部門」の2部門に、「国際交流推進部門」を新たな部門として設置して3部門とし、国際交流のより積極的で具体的な業務展開を推進することとした。

センターには、センター長1名、専任教員5名、また事務体制として、学務部留学生・国際交流課が配置され、教育、相談指導、交流事業等の業務に当たっている。主な内容は次のとおりである。

### (1) 日本語の授業

センターでは、研究・交流の場や日常生活の中で円滑な意思疎通が行えるように、留学生にさまざまな学習の機会を用意している。日本語の授業は、初級から上級までをカバーし、日本語のコミュニケーション技能と、日本語で行われる学術・研究活動での表現力の向上を目指すものである。現在、全留学生を対象としたカリキュラムとともに、学部留学生や国費留学生（研究留学生、教員研修留学生、日本語・日本文化研修留学生、日韓共同理工系学部留学生）を対象とした授業を行っている。

### (2) 相談指導

相談指導担当の教員が、修学上や生活の中で生じた問題について、留学生と話し合い、適切な助言を与えている。また、留学生、チューター、指導教員の間で連携をとることにより、必要なときに適切な支援ができるシステムづくりを目指している。

### (3) 交流事業

センターは、留学生と地域社会との充実した交流プログラムづくりに努めている。また、地元の国際交流団体やボランティアグループと連携することにより、交流の機会を少しでも増やそうと、地域住民に呼びかけてホームステイ体験事業を行っている。同時に多彩な文化交流活動を通じて、留学生と日本人学生の相互理解を深め異なる文化をお互いに尊敬する態度を養っている。

### (4) 調査・研究

日本語教育部門では日本語の構造、教授法、教材開発、異文化コミュニケーションなどのテーマ、また、留学生指導・相談部門では留学生の相談指導に関わる問題、そして、国際交流推進部門では、日本人学生の派遣前オリエンテーション、国際的な文化交流などのテーマについて調査・研究を行っている。

### (5) 留学生・国際交流課

留学生・国際交流課は、学生及び教員の国際交流に関する様々な業務を行うほか、センターの事務も担当し、留学生が安心して勉学に専念できるよう、以下のような修学上・生活上の支援業務を行っている。

- ・奨学金に関すること
- ・国際交流会館の入退去に関すること
- ・海外留学に関すること
- ・留学生のチューターに関すること
- ・地域交流事業についての情報提供に関すること

## 2 組織

(平成 27 年 3 月 1 日)

留学生・国際交流センター教員	
留学生・国際交流センター長 (農学部教授兼任)	横田 信三
教授(副センター長)	梅木 由美子
教授	吉田 一彦
准教授	戚 傑
准教授	鎌田 美千子
准教授	湯本 浩之

学務部留学生・国際交流課	
課長	中田 多美
課長補佐	武笠 昌弘
係長	黒澤 衣受美
係員	枇杷 景子
係員	原 裕美
事務補佐員	風間 恵美子
事務補佐員	本田 咲子
国際インターンシップ事務室	
コーディネーター	松井 貞
事務補佐員	鶴巻 麻衣

[非常勤講師]

井川 和子 石川 美和 八重島 炎

## 3 年間行事

### < 4 月 >

- 8 日 (火) 国際交流会館入居オリエンテーション／交通安全・生活安全講話
- 9 日 (水) 4 月来日留学生(学部留学生を除く)オリエンテーション
- 14 日 (月) 留学生アドバイザーによる新規留学生及びチューターに対するアドバイス週間(～18日(金))
- 14 日 (月) 学部1年生及び編入留学生オリエンテーション
- 15 日 (火) 4 月来日留学生生活上の留意事項説明会／4 月来日留学生歓迎会
- 15 日 (火) 初めて留学を考える人のための海外留学ガイダンス
- 18 日 (金) 平成26年度留学生支援事業に関する担当者会議(主催:栃木県国際交流協会)
- 21 日 (水) 米国大使館副領事による「米国留学説明会」
- 30 日 (水) 海外英語研修説明会

### < 5 月 >

- 9 日 (金) ホームステイウィークエンドin那珂川2014(春田植え)  
(主催:那珂川町教育委員会、～11日(日))
- 13 日 (火) 国際インターンシップ報告・説明会

### < 6 月 >

- 17 日 (火) 平成26年度外国人留学生栃木県内企業見学会(主催:宇都宮市国際交流協会)
- 19 日 (木) 栃木県地域留学生交流推進協議会総会
- 19 日 (木) 平成26年度留学生との交流会(主催:栃木県地域留学生交流推進協議会)
- 27 日 (金) 日韓共同理工系留学生事業協議会(会場:北海道大学)

### < 7 月 >

- 7 日 (月) 国際交流(七夕)の集い(主催:栃木経済校友会)

- 8日(火) 平成26年度海外留学渡航前危機管理オリエンテーション
- 12日(土) 平成26年度外国人学生のための進学説明会(東京会場)
- 13日(日) 平成26年度外国人学生のための進学説明会(大阪会場)
- 18日(金) 日本留学フェア(台湾)／留学生OB・OGとの懇談会／協定校訪問(～22日(火))
- 28日(月) 平成26年度交換留学生のための大学院進学説明会
- 28日(月) 前期短期留学プログラム修了発表会
- 29日(火) 日本語・日本文化研修留学生発表会

#### < 8月 >

- 5日(火) 前期交換留学生の終了式及び終了者との懇談会
- 6日(水) 平成26年度留学体験報告会・海外留学説明会
- 26日(火) 外国人留学生見学旅行(鎌倉・富士山方面、～27日(水))
- 30日(土) アメリカ・南イリノイ大学語学研修(～9月23日(火))

#### < 9月 >

- 14日(日) オーストラリア・サザンクロス大学語学研修(～27日(土))

#### < 10月 >

- 1日(水) 10月来日留学生オリエンテーション
- 3日(金) 国際交流会館入居オリエンテーション
- 10日(金) ホームステイウィークエンドin那珂川2014(稲刈り)  
(主催:那珂川町教育委員会、～12日(日))
- 16日(木) 10月来日留学生歓迎会

#### < 11月 >

- 7日(金) 平成26年度全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議  
(会場:チサンホテル&コンファレンスセンター新潟)  
平成26年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議  
(主催:大阪大学、会場:千里阪急ホテル)
- 13日(木) 日本留学フェア(ベトナム)／留学生OB・OGとの懇談会／協定校訪問(～17日(月))
- 20日(木) 平成26年度留学生指導教員及び事務担当者研修会(主催:栃木県地域留学生交流推進協議会)

#### < 12月 >

- 9日(火) 国際インターンシップ報告・説明会
- 11日(木) 平成26年度国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会(長崎大学他、～12日(金))

#### < 1月 >

- 27日(火) 英語圏留学経験報告会
- 28日(水) 中級日本語短期留学プログラム発表会

< 2 月 >

- 9 日 (月) 国際インターンシップ・危機管理オリエンテーション
- 17 日 (火) 留学生スキー研修会 (日光湯元スキー場、～18 日 (水))
- 19 日 (木) 栃木県地域留学生交流推進協議会運営委員会
- 28 日 (土) 県内留学生ホームステイ・プログラム (～3 月 1 日 (日))

< 3 月 >

- 16 日 (月) 外国人留学生と地域交流団体等との交流会

## Ⅱ 留学生・国際交流センターの活動





# 1 教育・授業

## 1.1 留学生・国際交流センター開講授業

### (1) 初級日本語補講

初級日本語補講は、大学院生、研究生、交換留学生、教員研修留学生などに対して行っている日本語教育で、大学内外での日常的なコミュニケーションに必要な基本的な日本語能力を身につけることを目指している。平成26年度に実施した初級補講は以下の通りである。研究留学生や大学院生は所属する研究室や自身の研究活動が忙しくなると、なかなか日本語補講に出席できなくなり、受講を半ばで諦める学生がいる一方、欠席した分をしっかりと自ら補って学んでくる学生がいる。担当講師としては後者のような学生が増えることを願っており、彼らに対応した指導法を考えていきたい。

#### <前期>

期 間：4月17日～7月25日

曜日・時限：火曜日1-2、木曜日 金曜日3-4

主テキスト：スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級I 第2版』

受講者：3名（大学院生1名 研究留学生1名 交換留学生1名）

授業担当講師：石川 美和（留学生・国際交流センター非常勤講師）

梅木由美子（留学生・国際交流センター教員）

#### <後期>

期 間：10月15日～1月23日

曜日・時限：月曜日5-6、木曜日 金曜日1-4

主テキスト：スリーエーネットワーク『みんなの日本語初級I 第2版』

受講者：6名（大学院生2名 研究留学生3名 教員研修留学生1名）

授業担当講師：石川 美和（留学生・国際交流センター非常勤講師）

八重島 炎（留学生・国際交流センター非常勤講師）

梅木由美子（留学生・国際交流センター教員）

（梅木 記）

### (2) 中級日本語短期留学プログラム

留学生センターでは、平成20年4月から、「宇都宮大学中級日本語短期留学プログラム」を実施してきている。本プログラムは、本学と交流協定を締結している海外の大学から派遣された留学生を対象とした、6ヶ月～12ヶ月間の留学プログラムで、このプログラムを通して日本語能力を上げるとともに、日本社会および日本文化について理解を深めることを目的にしている。

海外の交流協定提携校から本学に派遣された外国人留学生は、日本語能力が非常に限られており、その中には、中級日本語の授業を受講できるレベル（日本語検定試験3級くらいのレベルで、日常生活面においては、簡単な買い物ができ、自分で電車に乗られるくらいのレベル）の学生が多かった。これらの留学生は、学部で提供されている普通の日本人向けの授業を受講することは非常に困難である。これらの留学生のニーズに答えるため、留学生センターでは、検討を重ねた結果、平成20年度から、交流協定を結んでいる海外の大学からの留学生を対象とする「中級日本語短期プログラム」を実施することになった。平成25年度では、13名の留学生が本プログラムを修了した。

本プログラムの目的や平成26年度の実施要領等を以下に示す。

## 1) 目的

宇都宮大学（以下、本学という。）短期留学プログラムは、本学と交流協定を締結している海外の大学からの留学生を対象として受け入れ、本学における日本語教育、日本文化等の授業科目を提供するための教育プログラムである。この短期留学プログラムは、日本および日本文化に対するより良い理解者としてだけでなく国際社会で活躍できる人材を育成することを目的に、6ヶ月～12ヶ月にわたり、本学での日本語教育、日本文化体験および本学の学生・教職員との交流等を実施するであり、以下の通り要領を定める。

## 2) 対象者

本学短期留学プログラムに出願できる者は、以下の3つの要件をすべて満たしたものとする。なお、留学生・国際交流センター長が特別許可する者については、その限りではない。

- ①本学と学生交流協定を結んでいる外国の大学の正規課程に在籍している学部学生または大学院学生。
- ②渡日前に300時間程度の日本語教育を受けている者、あるいは日本語能力試験3級に合格している者。

## 3) 受入れ期間

原則として、10月からの1年間、または4月からの半年間とする。

## 4) 受入れ予定人数

10名～15名程度とする。

## 5) 修了要件

- ①一学期において、「短期留学プログラム」のコア日本語科目の中から3科目以上を履修すること。但し、学生の日本語能力によって、共通教育、または国際学部で開講する日本語科目を用いて替えることが出来る。
- ②一年間のコースには、年間10科目以上を履修し、且つ単位を取得すること。また、半年間のコースでは、5科目以上を履修し、且つ単位を取得すること。
- ③自主研究レポートを提出すること。

## 6) 自主研究：短期留学生特別演習 A・B

留学生は担当教員と相談した上で研究テーマを決める。更に、担当教員の指導のもと、研究成果をまとめたレポートを修了時に提出する。

## 7) 成績評価・単位認定

この教育プログラムの受講生に対して、履修した授業科目、成績評価および単位数を記載した成績書を発行する（ただし、留学センター開講科目については留学生センター長名で発行する）。本学の発行した成績書に基づき、留学生を派遣した大学において単位認定が行われる。但し、学位取得に関する単位として認定するか否かの判断は、留学生を派遣した大学に委ねる。

8) 平成 26 年度コア日本語科目

	科目の種類	科目名	単位	担当教員
前期	コア日本語科目	中級読解A	1	石川
		中級作文A	1	八重島
		中級作文A	1	八重島
		中級聴解A	1	戚
		漢字と漢字文化	1	戚
	演習科目 (必修)	短期留学生特別演習A	2	戚
後期	コア日本語科目	中級読解B	1	八重島
		中級文法B	1	八重島
		中級漢字	1	石川
		中級作文B	1	石川
		中級聴解B	1	戚
		中級会話B	1	戚
	演習科目 (必修)	短期留学生特別演習B	2	戚

9) 平成 26 年度前期プログラム修了発表会

宇都宮大学留学生・国際交流センター「中級日本語短期留学プログラム」修了発表会

7月28日(月) 18:00～19:00 留学生センター国際交流学習室

①開会の辞：横田 信三 (留学生・国際交流センター長)

②発表題目

a. 「日本人にとっての甲子園」…………… 呂 妍歆 (国際学部 交換留学生)

b. 「外国人留学生の就職活動について」…………… 謝 承哲 (国際学部 交換留学生)

③質疑応答

④総評：「中級日本語短期留学プログラム」コーディネーター 戚 傑



修了発表風景



修了発表風景



修了発表会場風景

### 10) 平成 26 年度後期プログラム修了発表会

宇都宮大学留学生・国際交流センター「中級日本語短期留学プログラム」修了発表会

1月28日(水) 18:00～20:00 留学生センター国際交流学習室

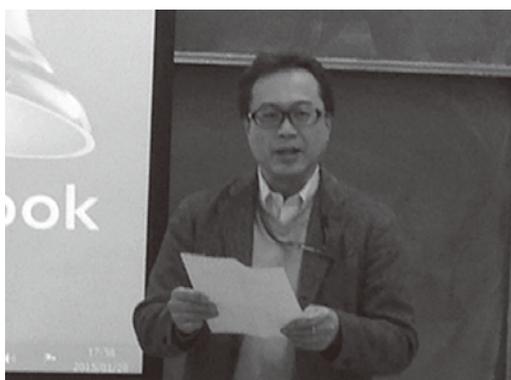
①開会の辞：留学生・国際交流センター長 横田信三先生

②発表題目

- a. 「現代日本語における女性用語について」……………方 桂飛 (国際学部 交換留学生)
- b. 「日本人にとって新聞の重要性と新しい役割」……………CHAN HSINYU (国際学部 交換留学生)
- c. 「第二言語習得と年齢の影響」……………ルオン・ハー・ミー (国際学部 交換留学生)
- d. 「『人間失格』から見る戦後日本人の喪失感と帰属感」……………李 思維 (国際学部 交換留学生)
- e. 「日本の独特な箸食文化」……………ド・ナム・ベト (国際学部 交換留学生)
- f. 「武士道文化と日本人の自殺行為について」……………張 星 (国際学部 交換留学生)
- g. 「格差社会における日本企業の労働・組織・労使関係：  
トヨタ自動車株式会社の管理制度を中心に」……………陳 超慧 (国際学部 交換留学生)
- h. 「日本語における表現の主観性について」……………李 聞怡 (国際学部 交換留学生)
- i. 「日本にいる外国人就職状況から  
“グローバル化”を見る」……………王 玉君 (国際学部 交換留学生)
- j. 「ジャニーズ文化について」……………スックサイ・イッサダー (国際学部 交換留学生)
- k. 「日本の学校におけるいじめ問題について」……………馬 麗萍 (国際学部 交換留学生)

③質疑応答

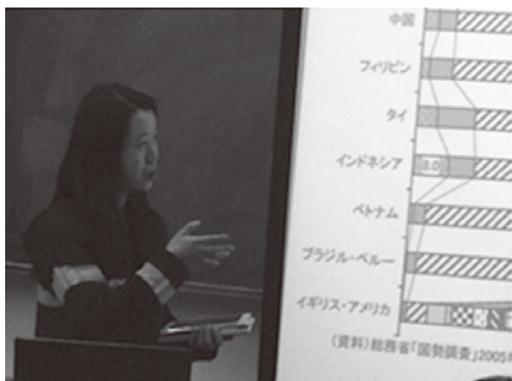
④総評：「中級日本語短期留学プログラム」コーディネーター 戚 傑



開会の辞：横田センター長



修了発表風景



修了発表風景



修了発表風景



修了発表会場風景

(威 記)

### (3) 中級日本語補講

中級日本語補講は、初級レベルを終了した学生を対象に、文法・対話・読解・作文の4つの基本的な技能が総合的に学べるように構成された日本語科目群で、中級レベルの日本語能力を養成することを目的としている。

本学で学ぶ留学生の数が年々増加しており、大学院生と学科・学部研究生は留学生の約半分を占めている。大学院生と学科・学部研究生の中に、日本語授業の単位修得を目的としていないが、日本語を勉強したい学生も大勢いる。中級一般日本語は、宇都宮大学に在籍するこれらの大学院外国人留学生と学科・学部研究生(科目等履修生を除く)を対象に開講する無単位の日本語教育科目である。

平成26年度前期と後期に、「中級日本語補習:総合A」、「中級日本語補習:聴解と会話A」、「中級日本語補習:読解と作文A」、「中級日本語補習:学術日本語I」と「中級日本語補習:学術日本語II」の10コマの授業が開講された。

(威 記)

## (4) 実践日本語

2008 年度から工学部陽東キャンパスにおいて、初中級レベルの一般日本語（聴く・話す・読む・書く）の総合能力を養成することを目的として、留学生・国際交流センター非常勤講師 1 名が、「実践日本語」の講義を開講している。これは主として工学部の留学生のニーズに応えるためのものであるが、他学部の学生も受講することができるものである。今年度も下記のとおり実施した。

教室：平成 26 年度前期 留学生・国際交流センター分室（工学部）

平成 26 年度後期 日本語セミナー室（工学部）

授業：前期 月曜 3-4 限、水曜 5-6 限

後期 月曜 1-2 限、3-4 限、水曜 5-6 限

教科書：『みんなの日本語』スリーエーネットワーク

その他

（留学生・国際交流課）

## (5) 学部 1 年生日本語補講

## 1) 概要

授業名	日本語特別演習
曜日・時間	水曜日・11-12
目的	大学入学初期に必要な語彙力・漢字・発音の強化
受講学生	4 名*
担当	鎌田 美千子

\* 該当学生は、レベルチェックテストの結果をもとに決定

## 2) 内容

講義を聞いてノートを取る上で基本となる語彙と漢字、また会話及び口頭発表の基本となる正しい発音を取り上げ、大学での勉学を進めていく上で必要な日本語能力の養成を図った。具体的には、次の通りである。

- ・ 同音異義語を含む文のディクテーション
- ・ 漢字の読み方と使い方の練習
- ・ 発音・イントネーションの練習

使用テキスト：

『完全マスター漢字日本語能力試験 1 級レベル』『完全マスター漢字日本語能力試験 2 級レベル』スリーエーネットワーク

『大学生のための日本語—効果的学習のために』産能大学出版部

『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク

その他

（鎌田 記）



## (6) 日本語以外の関連科目

前年同様、以上の日本語関連科目の他に留学生・国際交流センターの開講科目として、「日本語以外の関連科目」を下記のとおり開講した。

### 1) 開講科目

#### <前期>

- ①「多言語コミュニケーション学 A」(水 7-8 時限) 担当：吉田 一彦
- ②「日本語論述表現法 B (月 5-6 時限)」担当：吉田一彦
- ③「Linguistic Typology and Language Communication」(火 3-4 時限) 担当：吉田 一彦

#### <後期>

- ①「多言語コミュニケーション学 B」(月 9-10 時限) 担当：吉田 一彦
- ②「日本語論述表現法 A (水 3-4 時限)」担当：吉田 一彦
- ③「Japanese Communication Arts」(水 7-8 時限) 担当：戚 傑

### 2) 授業の概要

- ①「多言語コミュニケーション学 A」「多言語コミュニケーション学 B」  
日本語・英語とクラスメートの母語など使える言語をすべて使って、相互理解のためのコミュニケーションの実習をする。
- ②「日本語論述表現法 B」「日本語論述表現法 A」  
日本語で学術的なレポートや論文を作成するために必要な知識と表現技術を身につける。
- ③「Linguistic Typology and Language Communication」  
言語学の方法や専門知識を活用して、日本語・英語を含む自然言語の特徴を明らかにする。タスクをクラスメートと協力をして行うことで、授業をとおした交流をする。
- ④「Japanese Communication Arts」  
日本の社会システム、文化および歴史的背景を踏まえて日本語によるコミュニケーションの特質に関する理解を目的とする。

(吉田 記)

## 1.2 基盤教育および学部・大学院での授業

### (1) 日本語科目

宇都宮大学では、留学生・国際交流センター以外にも複数の部局で日本語教育を実施している。留学生・国際交流センター教員は、その中で基盤教育、国際学部の日本語教育を担当している。基盤教育では、学部留学生と特別聴講学生（交換留学生、日本語・日本文化研修留学生等）を対象とした日本語科目を開講している。

#### <基盤教育>

- ①学部 1 年生を対象にした必修科目  
・「アカデミック・ジャパニーズ」  
大学での勉学に必要な日本語能力を総合的に養う。  
・「日本語アカデミック・リーディング I」

さまざまなテーマに関する論説文を取り上げ、日本語の読解力を養う。

- ・「日本語アカデミック・ライティング」

学術的な文章の書き方と日本語表現を取り上げ、日本語の文章表現力を養う。

②選択科目

- ・「日本語アカデミック・リーディングⅡ」

大学での専門分野の勉学に必要な高いレベルの読解力を養う。

- ・「日本語アカデミック・プレゼンテーション」

ゼミや演習科目での発表全般（レジюме、スライドを含む）に必要な日本語運用力を養う。

- ・「人文社会系のための専門日本語」（計画開講）

学術的な言語運用場面（人文社会系）を想定し、専門教育に必要な日本語運用力を養う。

- ・「科学技術のための専門日本語」（計画開講）

学術的な言語運用場面（理工系）を想定し、専門教育に必要な日本語運用力を養う。

- ・「日本事情」

日本の社会や文化、自然を概観するとともに、日本人のコミュニケーションやものの考え方への理解を図る。

基盤教育の日本語科目時間表

【前期】

	3 - 4 時限	5 - 6 時限	7 - 8 時限	9 - 10 時限
月	人文社会系のための 専門日本語（谷）	アカデミック・ ジャパニーズ（鎌田）		
火	日本語アカデミック・ リーディングⅠ（梅木）			
水			日本語アカデミック・ リーディングⅠ（梅木）	アカデミック・ ジャパニーズ（鎌田）
金		日本事情 （モリソン）		

【後期】

	3 - 4 時限	5 - 6 時限	7 - 8 時限	9 - 10 時限
月		日本語アカデミック・ ライティング（鎌田）	日本語アカデミック・ ライティング（鎌田）	
水	日本語アカデミック・ リーディングⅡ（梅木）			
木			日本語アカデミック・ プレゼンテーション（鎌田）	

（鎌田 記）

(2) 日本語以外の授業科目

留学生センターの教員は、上記（1）の日本語科目に加えて、留学生・国際交流センター、基盤教育、学部、全学科目、大学院の授業科目を担当している。平成 26 年度に留学生センター教員が担当した授業科目は次の通りである。



### <基盤教育>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	多言語コミュニケーション学A	吉田	英・日2言語による授業
	ワークショップで学ぶ「変わりゆく現代社会の中の私たち」	湯本	アクティブ・ラーニング科目
後期	多言語コミュニケーション学B	吉田	英・日2言語による授業
	Japanese Communication Arts	戚	英語による授業
	言語習得論	鎌田	
	グローバル化と外国人児童生徒教育	戚+鎌田+他5名	他5名は国際学部、教育学部の教員

### <国際学部>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	日本語教育 I	梅木	日本語教育プログラム必修科目
	日本語教育 I 演習	梅木	
	日本語教育 II 演習	吉田	
	日本語教育方法論演習	鎌田	
	日本語教育特別演習	鎌田+梅木+吉田	日本語教育プログラム必修科目
	Linguistic Typology and Language Communication	吉田	英語による授業
	移民と多文化教育	戚	
	移民と多文化教育演習	戚	
後期	日本語教育 II	吉田	日本語教育プログラム必修科目
	日本語教育方法論	鎌田	日本語教育プログラム必修科目
	グローバル教育論	湯本	
	グローバル化と外国人児童生徒教育	戚+鎌田+他5名	他5名は国際学部、教育学部の教員
	卒業研究準備演習	梅木、吉田、戚、鎌田	
不定時	国際キャリア開発	湯本+他2名	他2名は国際学部の教員
	国際キャリア実習	湯本+他2名	他2名は国際学部の教員
通年	卒業研究	梅木、吉田、戚、鎌田	論文指導

### <全学科目>

学期	科目名	担当教員	備考
不定時	国際インターンシップ	吉田+湯本+他1名	他1名は国際学部の教員
	Academic Writing	戚	Advanced Learning+1
	Globalization and Society	湯本	Learning+1 (夏期集中講義)

### <国際学研究科・博士前期課程>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	国際交流と日本語教育	吉田	
	日本語論述表現B	吉田	
	言語教育論	鎌田	
	Methodologies of English Dissertation Writing (Lecture)	戚	英語による授業
	Academic Writing	戚	英語による授業
	国際学臨地研究	戚、鎌田	
	グローバル教育研究	湯本	

後期	日本語論述表現法 A	吉田	
	日本語教育特論	梅木	
	多文化教育論	戚	
	Methodologies of English Dissertation Writing (Lecture)	戚	英語による授業
通年	国際文化特別研究 / 国際交流特別研究 / 国際社会特別研究	梅木、吉田、戚、鎌田	論文指導

#### <国際学研究科・博士後期課程>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	国際学基礎演習	梅木、吉田、戚	
後期	現代日本語論	吉田	
	国際学リサーチ演習	吉田、戚	
	国際学臨地研究	吉田、戚	通年
	多文化教育研究	戚	
	言語教育研究	鎌田	
通年	特別研究 I	梅木、吉田、戚	論文指導
	特別研究 II	吉田、戚	論文指導
	特別研究 III	吉田、戚	論文指導

#### <教育学研究科・修士課程>

学期	科目名	担当教員	備考
前期	Academic Writing	戚	英語で行う授業
後期	多文化教育特論	戚	

#### <農学研究科・修士課程>

学期	科目名	担当教員	備考
集中	Globalization and Society	湯本	Advanced Learning+1

(梅木 記)

### 1.3 留学生プログラム

#### (1) 日韓共同理工系学部留学生予備教育

日韓共同理工系学部留学生の本学への配置はなかったが、例年開催されている日韓共同理工系留学生事業協議会に今年度も出席し、各種情報収集を行った。今年度は、6月27日に北海道大学で開催され、日韓共同理工系学部留学生への教育について韓国と日本の間で協議がなされた。関連する三つの講演と質疑応答がなされた後、全体討議「日韓プログラム事業の課題について考える」では、活発な議論と意見交換がなされた。

また、新たに「韓日共同学部留学生事業説明会」において本学の概要に関する資料提供を行った。この説明会は、日韓共同理工系学部留学生の保護者を対象に4月18日に大韓民国・国立国際教育院で開催されたものである。日本からの参加は三大学であった。

(鎌田 記)

(2) 日本語・日本文化研修留学生プログラム

1) 日本語・日本文化研修プログラムの授業

以下の4科目を留学生・国際交流センターでプログラムの必修科目として開講、他に12科目を留学生・国際交流センター、基盤教育、教育学部、国際学部などの開講科目から受講することが修了要件の一つである。このうち、「日研生特別研究Ⅰ」「同Ⅱ」の科目は平成25年度まで「日研生特別演習Ⅰ」「同Ⅱ」という名称の国際学部の専門科目であったが、本プログラムは大学全体で受け入れているプログラムであり、研修論文の指導もテーマの内容から国際学部だけでなく、教育学部や農学部などの教員に依頼することが増えてきていた。そのため、留学生・国際交流センターの科目とすることが妥当であると考え、平成26年度から変更した。担当教員は「日研生特別研究Ⅰ」「同Ⅱ」が梅木・吉田の両名、「日本語・日本文化Ⅰ」「同Ⅱ」が梅木である。

【プログラム前半（平成25年度後期）】

時 限	月	火	水	木	金
1-2					
3-4		日本語・日本文化Ⅰ			
5-6					
7-8					
9-10				日研生特別研究Ⅰ*	

\*原則として隔週開講 研修論文発表会前は毎週開講

【プログラム後半（平成26年度前期）】

時 限	月	火	水	木	金
1-2					
3-4			日本語・日本文化Ⅱ		
5-6					
7-8					
9-10				日研生特別研究Ⅱ*	

\*原則として隔週開講

2) 平成25-26年度日本語・日本文化研修留学生

平成25年度10月に来日した平成25-26年度の日研生は11名で、これまで本学で受け入れてきた日研生では最大人数となった。国籍も中国、タイ、マレーシア、アメリカ、イタリア、スリランカ、インドと多様であり、日本語能力も平均して高く、授業での発言も活発で非常に賑やかなクラスとなった。研究テーマは以下の通りで、来日直後と大幅に研究テーマが変わった学生もいたが、全員7月末に研修論文発表会を行い、研修論文を書き上げた。多忙の中論文指導を快諾してくださった先生方に改めて厚くお礼申し上げたい。研修論文は、平成26年12月に論文集として留学生・国際交流センターから発行した。

名前・所属大学・国	研修テーマ	指導教員
朱 舸 電子科技大学（中国）	在日中国人留学生の異文化適応に関する研究—「学習・研究」、「対人関係」及び「情緒」を中心に—	田巻 松雄 （国際学部）
JERDNAPAPUN CHITCHANOK カセサート大学（タイ）	日本語とタイ語の擬音語・擬態語の比較	吉田 一彦 （留学生・国際交流センター）
张 熹 浙江工業大学（中国）	日本の映画における桜に関する考察—1990年代以降の日本映画を対象として—	守安 敏久 （教育学部）
姚 佳芬 寧波大学（中国）	現代の中国と日本における女性像の変遷の比較	モリソン・バーバラ （国際学部）

潘 柳叶 浙江師範大学 (中国)	隠喩的慣用句	吉田 一彦 (留学生・国際交流センター)
PHANSALKAR ARJUN VIJAY テイラク・マハラシュトラ大学 (インド)	日本の近代化におけるお雇い外国人の役割	熊田 禎介 (教育学部)
BALASOORIYA UDANI SUGANDIKA ケラニア大学 (スリランカ)	おもてなしと環境共生社会	佐々木 和也 (教育学部)
JAYAMAHA AYESHA ケラニア大学 (スリランカ)	日本人による英語の発音の難度に関する研究	佐々木 一隆 (国際学部)
NATASHA TAN MAE TENG マラヤ大学 (マレーシア)	へんな和製英語	天沼 実 (教育学部)
COTTRELL ALLISON BETH ウィスコンシン大学 (アメリカ)	岡本太郎と草間弥生の作品にみられる日本現代美術の特徴	モリソン・バーバラ (国際学部)
EMANUELE BARALDI カ・フォスカリ大学 (イタリア)	日本の妖怪 一民話にまつわる妖怪と神の境界線—	大栗 行昭 (農学部)



校外学習 雲巖寺



校外学習 大雄寺



校外学習 多気不動尊



校外学習 うつのみや遺跡の広場



研修論文発表会



### 3) <平成 26-27 年度の日本語・日本文化研修留学生>

平成 26 年 10 月に来日した平成 26-27 年度の日研究生は以下の 9 名で、平成 26 年度前半の研修終了時点 (2015 年 2 月) のテーマは以下の通り。現在各自で研修を進めている。

名前・所属大学・国	研修テーマ	指導教員
馮 燕婷 寧波大学 (中国)	在留中国人の子育てについて	田巻 松雄 (国際学部)
PONGPATARAVIT PIYAPORN カセサート大学 (タイ)	外来語について	佐々木 一隆 (国際学部)
VALEK JAKUB パラツキー大学 (チェコ)	戦いの神、摩利支天	高山 啓子 (教育学部)

魯 燕青 浙江師範大学 (中国)	比較文化の観点から見た雨月物語中の中国小説の引用	大橋 敦 (国際学部)
SHOMURA KELSEY MARI ハワイ大学 (アメリカ)	日本のサービス・おもてなし	モリソン・バーバラ (国際学部)
JOSEFINA BEATRIZ DEL CAMPO SALINAS サンティアゴ大学 (チリ)	ラテンアメリカと日本の人間関係	アナ・スエヨシ (国際学部)
GIUSTO ILARIA カ・フォスカリー大学 (イタリア)	美術家の創作活動と災害	梶原 良成 (教育学部)
CHIRNOV IVAN パラツキー大学 (チェコ)	日本とチェコの関係について	渡邊 直樹 (国際学部)
JAROLIM MARCEL パラツキー大学 (チェコ)	即身仏の由来と歴史	高山 啓子 (教育学部)

(梅木 記)

## 1.4 英語関連科目

教育・研究の国際化が進むにつれ、宇都宮大学から海外へ派遣される日本人学生、中でも大学院生の数が年々増加している。留学生・国際交流センターでは、留学生や海外を目指す日本人学生の多様なニーズにこたえるべく、英語教育と英語による留学生指導を強化するように努めてきた。その一環として、留学を希望している日本人学生や国際会議での研究発表・外国との学術交流を希望する大学院生を対象に、英語コミュニケーション能力の向上に照準を合わせたカリキュラムの開発が、留学生センターで進められてきた。その結果、平成14年度に、コアカリキュラムの改訂に合わせて、英語による論文作成方法に関する授業科目を留学生センターの開講科目として開講されることになり、今日に至っている。平成26年度は、前年度に引き続き以下に示す英語関連科目を開講した。その概要を以下に報告する。

### (1) 科目名等

	講義・授業名	前期/後期	種別・対象学年・対象学生	単位数	担当教員
1	Japanese Communication Arts	後期	共通教育 1-4年次 日本人学生・留学生	2	威 傑
2	Academic Writing	前期	全学の大学院生・研究生	2	威 傑

### (2) 各科目の概要

#### 1) 「Japanese Communication Arts」

本科目は、留学生センターの開講科目として、平成15年度後期から、全学の日本人学生および留学生向けに開講してきた。当初、留学生センターの開講科目は単位認定されなかったが、単位認定をして欲しいという学生からの強い希望を受けて、平成16年度に共通教育の複合系の授業科目として、学部学生1～4年次の2単位選択科目となり、今日に至っている。本科目は、日本の社会システム、文化および歴史的背景を踏まえて日本語によるコミュニケーションの特質に関する理解を目的とする。なお、本科目は、英語により行なわれる。講義の内容等は以下の通りである。

#### ・ Course Description :

In this course, we will explore various aspects of Japanese Communication Arts. This course will introduce different communication styles, which are crucial for successfully functioning in Japanese society. Japanese has a set of discourse styles, or registers that can seem complex to newcomers. We will look at the styles of speech used in personal versus public situations, by men and by women, by old people and young people, in a way that will help clarify the differences and offer

you a window into Japanese culture. In addition to presenting the different styles, the class will help you situate them in terms of Japanese history, society, culture and education. The ultimate goal of this course is to help students enter the Japanese way of thinking through the Japanese language and through a deep knowledge of Japanese culture and society.

• Weekly Schedule

- Week 1 : Course introduction : what does “communication arts” mean?
- Week 2 : The Japanese style of introducing oneself : underestimating oneself.
- Week 3 : The differences between casual and formal speech in Japanese.
- Week 4 : Honorific language and humble language.
- Week 5 : Modesty : the Japanese way of responding to compliments.
- Week 6 : *Inside and outside* : words that shape personal relationships.
- Week 7 : *Tatemae* and *honne* : the gap between words and real intentions.
- Week 8 : Generation differences in speech.
- Week 9 : Gender differences in speech.
- Week 10 : Japanese pop songs : exemplifying gender differences in the family and society.
- Week 11 : The typical Japanese way of apologizing : no reason given.
- Week 12 : Vague expressions : saying “No!” without using the word “No!”
- Week 13 : Popular words : representing current social issues.
- Week 14 : Humor and wit : popular TV presenters’ communication styles.
- Week 15 : Student presentations : towards a better understanding of Japanese communication styles.

2) 「Academic Writing (Lecture)」

本科目は、国際会議での研究発表や外国との学術交流の機会が多い大学院生を多く有する工学部からの強い要望を受けて平成 14 年度 10 月から留学生センターの開講科目として提供してきたものである。学生から好評され、また単位認定をして欲しいという学生からの強い希望を受け、平成 16 年度からは教育学研究科から、前期 2 単位と後期 2 単位の科目として単位認定され、平成 24 年度からは国際学研究科からも単位認定されるようになった。さらに、26 年度から全学の院生向けの Learning+1 プログラムの 1 科目として「Academic Writing」と科目名を変え、全学の院生に開講することになった。本講義は全学の日本人学生、外国人大学院生・研究生を対象者とし、英語による学位論文や長い研究報告等を作成・発表する際必要となる基本事項の習得を目的とする。

• 授業内容 / Course Description

本授業では、論文作成の準備、研究の遂行、書き上げおよび代表的な学位論文の構成について講義する。英語による学位論文や長い研究報告等を作成・発表する際必要となる基本事項が習得出来るように計画されている。

This course is designed to provide an introduction to methodologies of writing dissertations or other large academic projects in English. Lectures will be arranged topically, with a view to familiarizing students with the most representative styles of writing and publishing in English. The purpose of this course is also to help students get to know the styles used for presenting research results in English.



・到達目標／ Course Objectives

i. 学術的目標／ Academic Support

- ・ 学位論文等の構成、作成にあたっての注意事項等を理解する。

To become familiar with styles of writing dissertations or other academic projects in English.

- ・ 英語で研究成果を口頭発表するテクニックを学ぶ。

To better understand styles of presenting research results in English.

ii. 技術的目標／ Technical Support

- ・ 論文作成にあたっての目標管理技術を習得する。

To help students set steps and goals for writing dissertations.

- ・ 論文作成に際して時間とストレスを自己管理できるようにする。

To help students manage time and stress.

・ 授業の計画／ Weekly Schedule

- 第1週 Communication : organizing the committee
- 第2週 Laying the groundwork for the dissertation or thesis
- 第3週 Finding a research problem
- 第4週 Topic and passion
- 第5週 Writing a successful proposal
- 第6週 Defending the proposal
- 第7週 Theory-the research wheel
- 第8週 Literature review
- 第9週 Research methodologies I : quantitative perspective
- 第10週 Research methodologies II : qualitative perspective
- 第11週 Research methodologies III : some other methods
- 第12週 Mastering the academic style I : APA style
- 第13週 Mastering the academic style II : MLA style
- 第14週 Common ethical concerns
- 第15週 Student presentation : show time

( 威 記 )

## 2 相談体制・生活支援

### 2.1 基本的認識

下記の〔事前の対策〕と〔様々な制約の中での適切・迅速な対応〕については、毎号同じ文章を掲載している。これは、留学生・国際交流センターが実施する「相談・指導」の根本に関わるものなので、今号についても前任者の文章を再掲した。

#### 〔事前の対策〕

留学生の置かれている立場は不安定なものである。一見何の問題もなく、元気で楽しく過ごしているように見える留学生でも、日本という「異国=外国」での生活は母国同様であるはずがなく、常にストレスと隣り合わせの毎日なのである。留学生と接する教員・職員はこのことを基本的認識として心にとどめ、日頃から彼らの行動や表情に注意を払う必要があるだろう。そして何らかの変化が見えたとき、留学生に歩み寄り、その変化に危険な要素が含まれていないかどうかを確認することが常に求められているのである。つまり、すでに起こってしまった問題にどのように対処するかということ以前に、問題を起こさないための事前の解決がきわめて重要な任務となるのである。

#### 〔様々な制約の中での適切・迅速な対応〕

しかしながら、全ての留学生にまんべんなく接することは不可能といわざるをえない。そこから何らかの問題が生ずることは避けられない事実でもある。実際のところ、大学が提供している生活環境、就学環境は残念ながら必ずしも適正なものとはいいがたい。それが原因となり留学生の心理が揺らぎ、留学生の生活に重大な影響を与えることもありうるのである。留学生を取り巻く環境を改善するには多額の資金が必要となり、大学全体として取り組む姿勢が十分整っていない現実には遺憾といわざるをえないが、そうした状況であっても、留学生と接する教員・職員は、むしろその中でより良い相談体制、より良い生活支援はどうあるべきかを考えると同時に、さまざまな制約下の現状でも実践できるものを実践していくという姿勢が必要なのである。特に深刻な問題を抱える留学生に対しては、解決に向けて適切に対応し、迅速に行動することが求められている。

(横田 記)

### 2.2 相談体制

留学生・国際交流センター専任教員5名のうち1名が生活・就学相談の担当者である。しかし、担当教員だけでなく、他の教員も日本語教育や国際交流推進を主な業務とすると同時に、必要に応じてその都度、留学生からの生活・就学相談に乗っている。授業中、または授業の前後に何気なく交わす会話も重要である。「相談」と改まってかまえるのではなく、留学生が言葉で表すことができないでいる、その時々々の心理状態を自然な対応で探ることが出来るからである。それにより、深刻な事態になる以前に留学生の気がかり、不安、現実的な問題を取り除く役割を果たしている。

5名の教員各自がオフィスアワーを設け、出来る限り留学生の相談に乗れる体制も取っている。留学生は、このオフィスアワーに、授業等で接する機会の多い教員の所へ相談に行く傾向がある。その際、留学生によっては長い滞在中、精神的に不安定な状態に陥る者もある。これはかなり深刻なケースであり、そのような場合、彼らは相談相手として先ず自分が最も信頼でき、しかも母国語でコミュニケーション出来る人を求める。当センターには、英語、中国語、フランス語、タイ語のできる教員がおり、実際に、深刻な問題を抱えて担当教員を訪れた留学生もいる。言語に関しては完璧とまでは行かないまでも、ある程度整った環境であると判断される。

留学生・国際交流課の職員も、留学生の相談に大きな役割を果たしている。彼らが諸手続等を行うために留学生・国際交流課の窓口に来た際、積極的に留学生に話しかけ、心配事、相談したいことがないかどうか、



常に配慮している。特に、交通事故、病気などの連絡が入った場合、休日を問わず、留学生をサポート出来る体制となっている。

留学生会館に居住する留学生に対しては、留学生会館主事が相談担当者となっている。週に2日、夕方から数時間、主事が会館に出向いて留学生の相談に当たっている。

この様に、相談体制については、相談・指導担当の教員だけでなく、センターの教員・職員が総動員で当たっている現状である。

(横田 記)

【平成 26 年度留学生センター教員のオフィスアワー】

曜日 教員名	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	その他 (E.mail等)
梅木		12:10~13:10				umeki@cc
吉田	16:10~17:40					ysd@cc
戚		12:00~13:00				jqj@cc
鎌田				11:30~12:30		kamada@cc
湯本		12:00~13:00				yumoto@cc

\* @ 以下は、cc.utsunomiya-u.ac.jp

### 2.3 相談実績

留学生・国際交流センターでは、留学生の様々な生活上の問題について相談を受けるのは当然のことながら、それに加えて日本人学生の留学関連の相談や、留学生と日本人学生の交友・交流に関するアイデア、企画に関する相談等も行っている。以前は、個々の相談に関する情報（日時、内容、留学生・日本人学生等の種別）を表で示していたが、実際に行った相談を全て記録することが実質的に不可能なので、2011 年号以降、表による実績表示を止めている。相談・指導と言っても、教員は授業等の大学における通常の主要業務にも携わっており、主に時間的理由により後回しとなり、重要であるなしに関わらず、また、手抜きということではなく、記録漏れとなってしまふ。また、近年ではメールや電話による連絡、問い合わせ、または相談が増加しており、これらを全て完璧に記録できる状況ではない。この様な場合における対応の仕方は、大学全体として考えていく必要がある。

以下、相談内容の概要を記述する。

〔留学生〕

修学・学習／進学（大学院受験等）／アルバイト／奨学金／各種保証人／ビザ取得

〔日本人学生〕

留学相談（留学先の情報、留学前の学習、各種書類作成）／チューター関連／留学生との交流

上記以外に、個々の教員が個別に相談・指導に当たっていることは既に記述した通りである。例えば、レポートや論文の書き方指導・添削、授業関連の相談等は個々の教員が行っている場合が多く、その方がより効率的である。

留学生の相談で深刻なものは、やはり経済的な問題である。特に、奨学金や入寮に関するものが重要なものである。例えば、本国からの仕送りも十分ではなく、奨学金も受給できず、授業料免除も受けられず、学生寮（国際交流会館）にも入れず、また、条件の良いアルバイトが見つげにくい、または病気・事故で身体を壊してしまい、アルバイトが出来ないという場合である。この様な場合が、考えられる最悪のものである。実際、この様な状況に置かれる留学生が毎年少なくとも1～2名おり、相談に当たることになる。その場合、個人的には

ただ話を聞くのみで、根本的な解決に結びつくようなことは何も出来ないのが実情である。しかし、学生寮については、来年度から陽東寮に加えて、第1寮及び第2寮において各4室ずつ、留学生が入寮できることとなった。所謂、学生寮の「混住化」である。1年以上の長期間滞在する留学生の場合、国際交流会館には1年間しか居住できず、それ以後は高額な民間のアパート等に引っ越ししかなかったが、「混住化」により比較的安価な学生寮に住むことが可能になった。いずれにしても、大学が、留学生の経済面を考慮した支援体制をより一層充実させて行くよう、センターとして積極的に働きかけていきたい。

(横田 記)

## 2.4 支援活動

### (1) 留学生アドバイザー

本学の在學生で、日本人学生と外国人留学生間の交流促進のため、各種イベントを企画・実施している。留学生アドバイザーには、海外留学経験者や海外留学予定者の他、外国人留学生も含まれている。留学生・国際交流センター等が実施する留学生関連の交流会や、留学生の生活上のサポート等にも協力するなど、幅広く活動している。

### (2) チューター

外国人留学生に対し、各留学生の学習・研究指導（予習・復習の手伝い）を中心に、日本語指導、日常の世話（学内外の案内、諸手続き、買い物、宿舎探しの補助等）を行う。チューターの支援を必要とする留学生ごとに、留学生の専門や出身国および語学力等を勘案し、チューター1名を割り当てている。チューターを付けられるのは、留学生が大学院生・研究生の場合は入学後最初の1年以内、学部生の場合には最初の2年以内で、指導教員の判断により必要と認める期間である。

(留学生・国際交流課)

## 2.5 各種オリエンテーション

外国人留学生に対するオリエンテーションは、交換留学生や学部新入学生を対象に宇都宮大学において勉学する際に必要な日本語科目、基盤教育関係科目、日本での生活をする上での諸注意等に関するオリエンテーションとチューター制度に関するオリエンテーションを実施した。

### (1) 開催実績

- 4月8日（火） 国際交流会館入居オリエンテーション／交通安全・生活安全講話
- 4月9日（水） 4月来日留学生オリエンテーション
- 4月14日（月） 学部新入留学生オリエンテーション
- 4月15日（火） 4月来日新規留学生生活ガイダンス
- 7月28日（月） 交換留学生のための大学院進学説明会
- 10月1日（水） 10月来日留学生オリエンテーション
- 10月3日（金） 国際交流会館入居オリエンテーション



## (2) 4月来日留学生オリエンテーション

## ＜実施概要＞

- 日 時：平成26年4月9日（水） 13：30～16：30  
場 所：4号館1454教室  
内 容：1) 留学生・国際交流センター長のお話  
2) 教員の紹介  
3) 職員の紹介  
4) 日本で生活する際に注意すべき大事なこと  
5) 授業登録および授業スケジュール等  
6) 日本語の授業について  
7) 中級日本語短期留学プログラムについて

## (3) 学部新入留学生オリエンテーション

## ＜実施概要＞

- 日 時：平成26年4月14日（月） 17：45～18：20  
場 所：4号館1454教室  
内 容：1) 留学生・国際交流センター長挨拶  
2) 教員紹介  
3) 留学生対象の日本語科目について  
4) 大学生活について

参加者：学部新1年生および3年次編入生

## (4) 留学生とチューターのオリエンテーション

- ・チューターの業務について
- ・事務関連注意事項
- ・質疑応答

## (5) 交換留学生のための大学院進学説明会

## ＜実施概要＞

- 日 時：平成26年7月28日（月） 16：10～17：30  
場 所：5号館国際交流学習室  
内 容：1) 留学生・国際交流センター長挨拶  
2) 本学大学院各研究科の教育・研究上の特色紹介  
3) 入試内容や入試日程に関する情報提供

## (6) 10月来日留学生オリエンテーション

## ＜実施概要＞

- 日 時：平成26年10月1日（水） 16：00～17：50  
場 所：4号館1444教室  
内 容：1) 留学生・国際交流センター長のお話  
2) 教員の紹介

- 3) 職員の紹介
- 4) 日本で生活する際に注意すべき大事なこと
- 5) 授業登録および授業スケジュール等
- 6) 日本語の授業について
- 7) 中級日本語短期留学プログラムについて

#### (7) 日本での生活のためのガイダンス

- ・交通安全上の諸注意について
- ・生活安全上の諸注意について
- ・日本での生活上の諸注意（きまり）について

(留学生・国際交流課)

## 2. 6 外国人留学生見学旅行

### (1) 実施概要

8月26日(火)より1泊2日の日程で、外国人留学生を対象に鎌倉および富士山周辺への見学旅行を実施した。本年度は32名の留学生が参加した。主な実施概要と旅程は、以下の通り。

日 程：平成26年8月26日(火)～27日(水) 1泊2日

行き先：鎌倉市内および富士五湖周辺・富士山五合目

宿泊地：石和温泉(「華やぎの章・慶山」)

参加者：留学生32名

引率者：教員 湯本 浩之

職員 武笠 昌弘 計2名(合計：34名)

旅 程：

< 28日(水) >

06:45 宇都宮大学正門前集合

07:00 宇都宮大学出発(経由：北関東道→東北道→首都高速→横浜横須賀道)

11:00 鎌倉・鶴岡八幡宮前到着。昼食・自由散策。

15:00 高德寺(鎌倉・長谷)集合

15:30 高德寺前出発(経由：新湘南バイパス→圏央道→中央道)

19:00 石和温泉到着

19:30 夕食

23:00 就寝

< 29日(木) >

07:00 起床・朝食

08:00 石和温泉出発

09:00 「西湖いやしの里・根場」到着。自由見学。

10:10 青木ヶ原樹海「鳴沢氷穴」到着。ガイドツアー。

12:30 富士山五合目到着。昼食・自由散策。

14:30 同出発(経由：中央道→首都高速→東北道→北関東道)

19:00 宇都宮大学到着・解散。

## (2) 主な見学先と参加者の行動

## 1) 第1日目：鎌倉周辺

初日は、午前7時に本学を出発した後、11時に鎌倉の鶴岡八幡宮前に到着。同八幡宮を参拝後、留学生は自由散策を行い、午後3時に「鎌倉大仏」で知られた高德寺（鎌倉・長谷）に集合した。境内を見学後に宿泊先の山梨の石和（いさわ）温泉へと向かった。宿泊先の旅館には午後6時半頃に到着。

## 2) 第2日目：富士山および富士五湖周辺

翌日は、朝の8時に旅館を出発し、最初に「西湖いやしの里・根場（ねんば）」を見学した。この施設は昭和41年に台風による土石流によって壊滅的な被害を受けた茅葺集落を再現した野外博物館である。敷地内には、約20棟の茅葺民家が復元されており、それぞれが資料館や体験工房などの生涯学習施設のほか、食事処や土産物店などの観光施設となっていた。その後、青木ヶ原の樹海内のある「鳴沢水穴（Ice Cave）」を見学。ここは代表的な溶岩洞窟で洞窟内の平均気温は摂氏3℃と低く、夏でも氷で覆われていた。また、洞窟を出てからは樹海内を30分ほど散策。世界文化遺産となった富士山の噴火の歴史をはじめ、樹海や溶岩洞窟について説明をボランティア・ガイドの方から受ける機会を持った。11時過ぎには風穴を出発。富士スバルラインを登って12時半には富士山五合目に到着。レストハウス内での昼食後は五合目周辺での自由行動とし、午後2時半に五合目を出発。予定通り夜の7時に本学に到着し、全員無事に解散した。



鎌倉大仏の前で



宿舎での夕食

(湯本 記)

## 2.7 外国人留学生スキー研修会

## (1) 実施概要

2月12日（水）から1泊2日の日程で、標記研修会を日光湯元スキー場（栃木県日光市）において実施した。今年度の参加者は、外国人留学生24名、日本人学生2名、引率教職員4名の合計30名であった。なお、日本人学生にはスキー研修の際の指導補助や宿泊時の生活補助などの役割を担ってもらった。

主な実施概要は、以下の通り

日 程：平成27年2月17日（火）～18日（水） 1泊2日

行き先：日光湯元スキー場（栃木県日光市）

宿泊先：奥日光湯元温泉「ふおーれすと・いん実之屋」

参加者：留学生24名／日本人学生2名（小計：26名）

引率者：教員 横田信三・湯本浩之／職員 黒澤衣受美・原裕美 計4名（合計：30名）

## (2) 主な研修内容と研修成果

2日間の主な日程は、次の通りであった。初日は朝8時半に集合し、9時に本学正門前を出発。11時には宿舎の「実之屋」に到着。昼食後、午後1時からゲレンデでのスキー講習となった。約3時間のレッスンを終えて宿舎に戻り、夜7時から宿舎の大広間で夕食を取り、交流会を行った。交流会後には、宿舎近くの湖畔広場で開催されていた雪まつり「雪灯里」の会場を散策した。

2日目は朝9時から約3時間のレッスンを行った後、宿舎で昼食を取って帰路についた。途中、日光東照宮付近で買い物のために自由時間を取り、午後4時には大学到着となった。

研修に関しては、スキーの経験別のグループに分かれて、スキー学校のインストラクターから基礎的な指導を受けた。初日からスキーリフトに乗るグループもあり、2日目には全員がスキーリフトに乗り、初級コースを滑り降りるまでに上達することができた。

(湯本 記)



日光湯元スキー場でのスキー研修会



### 3 留学生交流支援

#### 3.1 栃木県地域留学生交流推進協議会

本協議会は、栃木県における留学生等の円滑な受入の促進と交流活動の推進を図り、地域住民の国際理解に寄与するために設立されたもので、県内の高等教育機関、国の機関、地方公共団体、経済団体及び国際交流団体等で構成されている。本年度は以下のとおり、6月に総会、2月に運営委員会が開催された。

##### (1) 栃木県地域留学生交流推進協議会・総会

開催日時：平成26年6月19日（木）15：30～

- 議 題：1) 平成25年度栃木県地域留学生交流推進協議会実施事業について  
 2) 平成25年度本推進協議会実施事業経費決算について  
 3) 平成26年度本推進協議会実施事業計画（案）について  
 4) 平成26年度本推進協議会実施事業経費予算（案）について  
 5) 平成26年度本推進協議会感謝状贈呈候補者（案）について  
 6) その他



「推進協議会」総会

- 報告事項：1) 本推進協議会機関紙「まろにえ（第25号）」の発行について  
 2) 平成25年度県内各種団体等による主な外国人留学生交流・支援事業について  
 3) 本推進協議会事業会計に係る平成26・27年度監査員について  
 4) 第26回「国際交流の集い（副題：七夕の集い）実施計画（案）」について  
 5) その他

##### (2) 栃木県地域留学生交流推進協議会・運営委員会

本運営委員会は、栃木県地域留学生交流推進協議会規約（以下「協議会規約」という。）第8条第2項の規程に基づき設置され、協議会規約第3条に規定する協議事項について、具体的な実施方策を協議している。

開催日時：平成27年2月19日（木）15：30～

- 議 題：1) 平成26年度本推進協議会実施事業について  
 2) 平成26年度本推進協議会事業経費決算（見込み）について  
 3) 平成27年度本推進協議会事業計画（案）について  
 4) 平成27年度本推進協議会実施事業経費予算（案）について  
 5) 平成27年度本推進協議会感謝状贈呈候補者（案）について  
 6) その他

- 報告事項：1) 本推進協議会機関誌「まろにえ（第25号）」の発行について  
 2) 平成26年度県内各種団体等による主な外国人留学生交流・支援事業について  
 3) 本推進協議会事業経費に係る平成26・27年度監査員について  
 4) 平成26年度「グローバル企業人材確保支援事業」について  
 5) その他

### (3) 留学生指導教員及び事務担当者研修会

本研修会は、栃木県内の大学、短期大学、高等専門学校において、留学生に対する教育、指導・相談を担当する教職員が一同に会し、留学生の受入れ・派遣における教職員相互の協力のあり方等について討議することにより、今後の留学生指導・支援の充実に資することを目的として、本「推進協議会」が開催するものである。本年度は以下のとおり研修会が実施された。

開催日時：平成 26 年 11 月 20 日（木） 13：30～15：30

議 題：栃木県地域留学生交流推進協議会事務局の事務の分担について

（留学生・国際交流課）

## 3.2 交流支援事業

### (1) 平成 26 年度留学生との交流会

開催日時：平成 26 年 6 月 19 日（木） 17：10～18：40

実施内容：宇都宮大学内において、県内の 7 の高等教育機関から約 50 名の留学生と栃木県地域留学生交流推進協議会の構成機関・団体関係者や宇都宮大学教職員等約 20 名、計約 70 名が参加して交流会が開催された。



留学生との交流会

### (2) 国際交流の集い（七夕の集い）

開催日時：平成 26 年 7 月 7 日（日）

実施内容：協議会の構成員である栃木経済交友会の主催で、栃木県地域留学生交流推進協議会と協議会の構成員である（財）栃木県国際交流協会が後援し、北関東総合警備保障株式会社において県内の留学生約 100 名が参加して「七夕の集い」が開催された。



国際交流の集い（七夕の集い）

### (3) 外国人留学生と地域交流団体等との交流会

宇都宮大学内において地域の交流団体・地域住民と宇都宮大学留学生との交流会を下記のとおり開催した。

開催日時：平成 27 年 3 月 16 日（月） 12：30～18：30

場 所：大学会館（多目的ホール・和室・トークルーム・生協ホール）

参加者数：約 140 名

<内訳>

留学生 約 40 名

サークル所属の日本人学生 約 20 名

交流団体・近隣の自治会役員等 約 50 名

教職員 約 30 名

プログラム：

- 12：30～15：00 交流会行事1 日本文化体験コーナー（和服の着付け・茶道・華道・折り紙）  
 15：00～16：50 交流会行事2 日本の伝統的芸能鑑賞（日本舞踊、箏曲・琉球太鼓）  
 17：00～18：30 懇親交流パーティー



地域交流団体交流会の様子

（留学生・国際交流課）

### 3.3 ホームステイ事業

#### (1) 県内留学生ホームステイ・プログラム

日本の家庭での日常生活を体験することを通して留学生と県民の交流を図り、相互理解を促進することを目的に、栃木県地域留学生交流推進協議会と協議会の構成員である（財）栃木県国際交流協会との共催で、県内大学等に在学する留学生を対象としたホームステイ・プログラムを毎年実施している。

本年度は、平成27年2月28日（土）～3月1日（日）の1泊2日で計画され、栃木県内のホストファミリーの協力を得て、日本家庭の生活を体験した。

（留学生・国際交流課）

### 3.4 小・中・高等学校での国際交流

栃木県内の小・中・高校からの要請により、本学の留学生を各学校の授業にゲストとして派遣し、交流や対話の場を提供している。留学生と児童・生徒が直接触れ合う国際交流を通じて、留学生にとっても日本の児童・生徒にとっても、異文化理解や異文化コミュニケーションを図る上での貴重な機会となっているとの評価が各学校から寄せられている。

なお、スーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）に指定された栃木県立栃木高等学校では、平成24年度から本学の工学研究科及び農学研究科の留学生が英語でのプレゼンテーションを実施している。

<開催実績>

- ① 平成26年5月20日（火） 宇都宮大学教育学部附属中学校
- ② 平成26年12月8日（月） 栃木県立栃木高等学校
- ③ 平成26年12月16日（火） 栃木県立栃木翔南高等学校
- ④ 平成27年3月16日（月） 栃木県立宇都宮高等学校

（留学生・国際交流課）

## 4 留学生の獲得施策

### 4.1 日本留学フェア

独立行政法人日本学生支援機構の主催による日本留学フェアが今年度も開催され、本学は台湾とベトナムの2か国のフェアに参加した。今年度はそれぞれの国において本学留学経験者・関係者がブース業務を自発的に補助してくれたおかげで訪問者への対応が大いにはかどった。台北では交換留学中の本学学生が集まり、学生の立場から本学のアピールをしてくれた。また、ハノイでは元交換留学生在がブース担当通訳として活躍し、本学への留学の成果が生かされる機会となった。こうした協力者やブースを訪れた同窓生の多くは、4.4に述べる同窓会立ち上げに向けた意見交換会にも参加し、これらの国からの日本留学事情や本学の広報活動についての意見を聞かせてくれた。

#### (1) 台湾

平成26年7月19日(土)に高雄市で、20日(日)に台北市で開催され、国際学部松金教員、留学生・国際交流センター吉田教員、留学生・国際交流課黒澤係長および原係員の4名が参加した。

それぞれ、高雄で1637人、台北で3048人の入場者があり、2つの会場とも、100名程度に本学の資料を配布した。本学ブースには高雄では23名、台北では30名の相談者があった。問い合わせ内容としては、国際学部のカリキュラムや大学院の各研究科で学べる専門分野についての詳細を尋ねるものが多かった。また、日本留学試験の試験科目など入学するための条件、授業料や生活費などについて、奨学金や寮の有無に関する問い合わせも多かった。



高雄会場



台北会場

#### (2) ベトナム

平成26年11月15日(土)にハノイ市で、16日(日)にホーチミン市で開催され、留学生・国際交流センター吉田教員、留学生・国際交流課中田課長の2名が参加した。

それぞれ、ハノイで1,396人、ホーチミンで1,265人の入場者があり、2つの会場とも、台湾のフェアの際と同様に100名程度に本学の資料を配布した。本学ブースにはハノイでは25名、ホーチミンでは22名の相談者があった。今回も、両会場とも専門分野の特定のテーマに関する研究ができるかどうかを問う人



ハノイ会場



ホーチミン会場

が多かった。

(吉田 記)

## 4.2 外国人学生への進学説明会

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）では、「外国人学生のための進学説明会」を東京及び大阪で年に1回ずつ主催している。この「説明会」は、日本の日本語教育機関等に在籍し、大学等への進学を目指している外国人留学生を主な対象として、かれらの進学希望にあった大学等を選択できるよう、全国から大学等が参加して、入試情報をはじめ、教育・研究上の特色等に関する最新の確かな情報の提供を行うものである。留学生・国際交流センターでは、この「説明会」を外国人留学生獲得のための重要施策のひとつと位置づけて、教職員を派遣している。

### (1) 「外国人学生のための進学説明会（東京会場）」

#### 1) 実施概要

日 時：平成 26 年 7 月 12 日（土）10：00～16：00

場 所：サンシャインシティワールドインポートマート展示ホールA

参加機関：184 機関（大学・短期大学 154 校、高等専門学校 1 機関、専門学校 29 校）

来場者数：2,536（参考：H25 年度 2,327 名）

#### 2) 本学ブース

担 当 者：湯本 浩之（留学生・国際交流センター教員）

中田 多美（留学生・国際交流課長）

勝瀬 京（入試課入学試験第二係長）

来訪者数：61 名 + 4 機関

配付資料：『本学 GUIDE BOOK 2015』

『宇都宮大学概要（簡略版）』

『私費外国人留学生入試一覧』

各研究科所属教員・研究分野リスト

2014 オープンキャンパスチラシ

本学ロゴ入りノート



東京会場の本学ブース

主な相談内容：

- ・ 経済学、経営学に関する学部の有無
- ・ 日本留学試験の成績や合格ライン
- ・ 入試科目と英語、TOEFL の扱い方
- ・ 大学院の受験方法
- ・ 研究生の志願手続き
- ・ 3 年次編入実施学部の有無及び出願資格

・授業料、授業料免除、奨学金                      ・アルバイト等生活全般

### 3) 特記事項

本年度は、入試の合格ラインに対する質問が多かった。

## (2) 「外国人学生のための進学説明会（大阪会場）」

### 1) 実施概要

日 時：平成 26 年 7 月 13 日（日）10：00～16：00

場 所：グランキューブ大阪イベントホール

参加機関：129 機関（大学・短期大学 111 校、

高等専門学校 1 機関、専門学校 17 校）

来場者数：1,313 名（参考：H25 年度 1,095 名）

### 2) 本学ブース

担 当 者：福村 一成（農学部教授）

武笠 昌弘（留学生・国際交流課長補佐）

来訪者数：16 名 + 1 機関

配付資料：『宇都宮大学 GUIDE BOOK 2015』

『宇都宮大学概要（簡略版）』

『私費外国人留学生入試一覧』

各研究科所属教員・研究分野リスト

2014 オープンキャンパスチラシ

本学ロゴ入りノート



大阪会場の本学ブース

主な相談内容：

- ・試験科目について
- ・日本留学試験及び TOEFL の基準点について
- ・経済学、経済学に関する学部学科について

### 3) 特記事項

来場者の傾向として、各大学のブースを訪れて情報収集をして進学先を決めるというよりも、来場前にほぼ進学先を決めておき、合格できるラインかどうか、また学びたい専門内容が合っているかどうかを確認する目的でブースを訪れる者が多かった。

（留学生・国際交流課）

## 4. 3 交換留学生のための大学院進学説明会

国際交流がますます盛んになるにつれ、海外交流提携校から本学への交換留学生が年々増加してきている。より優秀な大学院生を獲得するため、交換留学生を対象に本学大学院における各研究科の教育・研究の特色や入試内容・日程等に関する情報を提供する目的で、留学生・国際交流センターでは、平成 23 年度から「交換留学生のための大学院進学説明会」の開催を実施してきている。平成 26 年度も例年通りに実施され、その概要が以下の通りである。

### <実施概要>

日 時：平成 26 年 7 月 28 日 16：10～17：10

場 所：留学生・国際交流センター 4F「国際交流学習室」

参 加 者：本学に在籍している交換留学生（特別聴講生）

配布資料：・大学院入試関係スケジュール表

- ・国際学研究科学生募集要項
- ・教育学研究科学生募集要項
- ・工学研究科学生募集要項
- ・農学研究科学生募集要項
- ・本学大学院担当教員教育研究専門分野一覧表



開会挨拶：横田センター長

- 内 容：1) 開会挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）  
 2) 各研究科の紹介 …………… 戚 傑（留学生・国際交流センター教員）  
 3) 大学院入試関係スケジュール …………… 武笠 昌弘（留学生・国際交流課課長補佐）  
 4) 質疑応答

（戚 記）

#### 4.4 海外同窓会

2012年9月16日のバンコクでの帰国留学生同窓会ネットワーク会議、そして、同年11月24日のハノイでの意見交換会、そして、2013年10月27日にはジャカルタでも同窓生との意見交換会を行い、同窓生同士のつながりを維持するためのサポートを行ってきた。

2014年度も、独立行政法人日本学生支援機構が主催する日本留学フェアへの参加の機会を利用して、台湾とベトナムとで、中でも本学への留学経験者および現地で働く同窓生が多い都市で意見交換会を行った。



7月18日 高雄にて



7月20日 台北にて

台湾では、この地を研究のフィールドとし交流を継続している国際学部松金公正教授の尽力が大きく、大勢の関係者が集まり盛況であり、今後の協力関係等について話し合った。

また、ベトナムでは、ベトナム人同窓生の過半数を出し、現在も5名の留学生の出身地である中部の都市ダナンを初めて訪れることができた。ここでは、本学にて学位取得をして帰国した後に同市にて研究教育職に就いている同窓生を中心にして同窓会組織を作っていくことや、ハノイやその他のところにいる同窓生も合わせて組織化して連絡を取り合うこと、また、本学と同窓生3名が勤務するダナン大学工科大学との交流協定締結の可能性を探っていくことで合意した。同窓生が本国に戻り専門知識・技能を生かしている様子は後輩の留学生を勇気づけるものであり、今後も広報活動をとおして伝えていくべきである。



11 月 13 日 ダナンにて



11 月 14 日 ダナン大学工科大学にて

(吉田 記)



## 5 日本人学生の海外派遣留学の推進・支援

### 5.1 海外留学説明会

グローバル人材の育成が叫ばれている今日、留学生・国際交流センターでは、海外に目を向け、交換留学はもちろん、短期の語学留学などに積極的にチャレンジしようとする学生を育成するため、学部新生を対象とした海外留学ガイダンスを入学後早い時期に開催している。「海外留学ガイダンス」では、海外留学の意義や海外留学に対する様々な支援の説明などを行った。また、本年度から新たな試みとして、オーストラリア・サザンクロス大学及びアメリカ・南イリノイ大学への語学研修プログラムを開始することに伴い、年度当初に各プログラムの説明会を実施した。

さらに、交流協定締結大学の増加に伴い、当然のことながら交換留学による派遣留学生数も年々増え続けている。留学を希望する学生の多様なニーズに的確に応えていくため、関係者全員が全力を挙げて支援事業に取り組んでいる。そのような中で、当センターでは、海外の交流協定締結校へ留学を希望する学生を対象に留学説明会を毎年開催し、併せて海外留学支援制度等の経済支援についての説明も行っている。海外留学の意義、勉強と生活上の注意点等について説明するとともに、『宇都宮大学海外留学ガイドブック』を配布した。

#### (1) 初めて留学を考える人のための海外留学ガイダンス

日 時：平成 26 年 4 月 15 日（火）16：00～

場 所：4 号館 1353 教室

内 容：1) 挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）  
2) 海外留学に対する支援等について …………… 留学生・国際交流課 担当職員

#### (2) 海外英語研修説明会

日 時：平成 26 年 4 月 30 日（水）17：50～18：50

場 所：5 号館 1121 教室

内 容：1) オーストラリア サザンクロス大学語学研修について  
2) アメリカ 南イリノイ大学語学研修について



海外英語研修説明会

#### (3) 海外留学説明会

日 時：平成 26 年 8 月 6 日（水）14：40～15：40

場 所：4 号館 1253 教室

内 容：1) 挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）  
2) 海外留学について  
…………… 吉田 一彦（留学生・国際交流センター教員）  
3) 平成 27 年度交換留学について …… 留学生・国際交流課  
4) 留学と就職活動について …… キャリア教育・就職支援室  
5) 単位認定制度について …………… 修学支援課国際学部係



海外留学説明会

（留学生・国際交流課）

## 5.2 海外留学体験報告会

留学生・国際交流センターでは、前記の「海外留学説明会」に先立って、留学を希望する日本人学生への情報提供も兼ねて、海外留学体験報告会を下記のとおり開催した。オルレアン大学（フランス）、トリン大学（アメリカ）、そして浙江大学（中国）に交換留学を体験した学生3名が体験報告し、主として留学中に苦労した問題やそれらをいかに克服したか、または留学中の生活、さらに留学によって得た収穫等について語り、続いて参加学生の質問に答える形で進行した。

日 時：平成 26 年 8 月 6 日（水） 13：30～14：30

場 所：4 号館 1253 教室

内 容：1) 挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）  
2) 留学体験学生による報告（3 名）

（留学生・国際交流課）

## 5.3 国際インターンシップ

宇都宮大学の「グローバル人材育成プログラム」の一環として、昨年度から、栃木県内に本社や事業所を置く企業の海外支社や海外事業所等で就労体験を行う国際インターンシップを本格的に開始した。

本年度は、夏期インターンシップに 15 名、春期インターンシップに 6 名の合計 15 名をベトナム、マレーシアそしてシンガポールの 3ヶ国へインターン生として派遣することができた（下記「派遣実績」参照）。留学生・国際交流センターでは、夏期および春期の休暇中の約 2 週間の実習に先立ち、体験者の報告をはじめ、国際インターンシップの概要やその手続などの説明を目的とした報告・説明会を開催したほか、インターン生を対象とした派遣前オリエンテーションを開催した。

なお、夏期国際インターンシップに参加した学生の実施報告については、『平成 25 年度～平成 26 年度 夏期国際インターンシップ報告書』（平成 27 年 3 月）を参照されたい。

### (1) 第 1 回「国際インターンシップ」報告・説明会

日 時：平成 26 年 5 月 13 日（火） 16：10～18：30

場 所：宇都宮大学 UU プラザ 2 階 コミュニティフロア

内 容（敬称略）： （進行）湯本 浩之（留学生・国際交流センター）

- 1) 開会挨拶 …………… 横田 信三（留学生・国際交流センター長）
- 2) 平成 25 年度春期国際インターンシップ参加学生報告（5 名）
- 3) 国際インターンシップ受け入れ先企業の報告 … 五百部 敏行（株式会社エマール総務部長）
- 4) アンケート結果報告 …………… 松井 貞（国際インターンシップ・コーディネーター）
- 5) 平成 26 年度夏期国際インターンシップ説明 …………… 中田 多美（留学生・国際交流課長）
- 6) 懇親会

### (2) 「夏期国際インターンシップ」オリエンテーション

日 時：平成 26 年 7 月 8 日（水） 16：10～16：40

場 所：4 号館 1253 教室

内 容：1) 講話「国際インターンシップについて」…………… 湯本 浩之（留学生・国際交流センター）  
2) 事務説明「参加に係る事務手続きについて」…………… 中田 多美（留学生・国際交流課長）



(3) 第2回「国際インターンシップ」報告・説明会

日時：平成26年12月9日（火） 16：10～19：00

場所：宇都宮大学 峰ヶ丘講堂

内容（敬称略）：

（進行）吉田 一彦（留学生・国際交流センター）

- 1) 開会挨拶…………… 重田 康博（国際学部教授）
- 2) 平成26年度夏期国際インターンシップ参加学生報告（9名）
- 3) 国際インターンシップ受け入れ先企業の報告… 小菅 一男（第一化成株式会社総務人事課長）
- 4) アンケート結果報告…………… 松井 貞（国際インターンシップ事務室）
- 5) 平成26年度春期国際インターンシップ説明…………… 中田 多美（留学生・国際交流課長）
- 6) 懇親会

(4) 「春期国際インターンシップ」オリエンテーション

日時：平成27年2月9日（月） 13：00～13：30

場所：4号館A棟2階 多目的ルーム

- 内容：1) 講話「国際インターンシップについて」…………… 松井 貞（国際インターンシップ事務室）  
 2) 参加に係る事務手続きについて…………… 中田 多美（留学生・国際交流課）



報告・説明会



オリエンテーション

(5) 派遣実績

1) 平成26年度 夏期国際インターンシップ（9名）

	氏名	学部・研究科	学年	実習先企業	実習期間	実習国
1	佐藤 静華	国際学部	3	第一電子工業（株）	9/15～9/26	ベトナム
2	西川 珠美	国際学部	3	（株）エマール	8/18～8/29	ベトナム
3	早瀬 桃子	国際学部	3	（株）エマール	8/25～9/5	ベトナム
4	西井 将騎	工学部	1	第一化成（株）	8/25～9/5	マレーシア
5	西岡 駿介	工学部	1	第一電子工業（株）	9/15～9/26	ベトナム
6	内田 智美	工学部	3	第一化成（株）	8/25～9/5	マレーシア
7	神長 宏章	工学研究科	1	第一電子工業（株）	9/15～9/26	ベトナム
8	新井 翠	農学部	3	（株）エマール	8/18～8/29	ベトナム
9	阿久津 帆央	農学部	3	第一化成（株）	8/25～9/5	マレーシア

## 2) 平成 26 年度 春期国際インターンシップ (6 名)

	氏名	学部・研究科	学年	実習先企業	実習期間	実習国
1	伊藤 千尋	工学部	3	(株) キヤム	1/26 ~ 2/6	シンガポール
2	小堺 昂平	工学研究科	1	日本サーファクトタント工業 (株)	2/23 ~ 3/6	シンガポール
3	舩谷 匠登	工学研究科	1	日本サーファクトタント工業 (株)	2/23 ~ 3/6	シンガポール
4	中三川 実里	農学部	2	(株) エマール	3/2 ~ 3/13	ベトナム
5	廣瀬 達也	農学部	2	(株) エマール	3/2 ~ 3/13	ベトナム
6	那須 礼二	農学部	3	(株) 板通	2/16 ~ 2/27	タイ

(留学生・国際交流課)

## 5.4 海外渡航前危機管理オリエンテーション

留学生・国際交流センターでは、海外留学の推進を行うと同時に、複雑化する国際情勢や自然災害などから生じる危機から学生を守るため、学生一人一人の危機に対する意識の涵養を図るため、「海外渡航前危機管理オリエンテーション」を開催している。これは、交換留学や国際インターンシップで海外に留学する学生に参加を義務付けるとともに、夏休みなどの期間を利用して海外に渡航する学生も対象にしたものである。

今年度は、夏期と春期の国際インターンシップの実施に合わせ、7月と2月の計2回を実施した。

## (1) 第1回「海外渡航前危機管理オリエンテーション」

日 時：平成 26 年 7 月 8 日 (火) 16:10 ~ 18:00

場 所：4 号館 1253 教室

内 容：1) 危機管理に関する講話 湯本浩之・吉田一彦 (留学生・国際交流センター教員)  
 2) 外務省ビデオ視聴「なぜ君がねらわれるのか」  
 3) 渡航前安全対策や危機発生時の対応 …………… 留学生・国際交流課 担当職員

## (2) 第2回「海外渡航前危機管理オリエンテーション」

日 時：平成 27 年 2 月 9 日 (月) 13:00 ~ 15:00

場 所：4 号館 A 棟 2 階多目的ルーム

内 容：1) 危機管理に関する講話 湯本浩之・吉田一彦 (留学生・国際交流センター教員)  
 2) 外務省ビデオ視聴「なぜ君がねらわれるのか」  
 3) 実際にトラブルに巻き込まれたら …………… 留学生・国際交流課 担当職員  
 4) 緊急時の連絡先等について …………… 留学生・国際交流課 担当職員

(留学生・国際交流課)



## 6 各種協議会等への参加

### 6.1 日韓共同理工系学部留学生事業協議会

#### (1) 実施概要

日 時：2014年6月27日（金）13：00～17：00

場 所：北海道大学学術交流会館

参加大学：36大学（89名）

本学参加者：鎌田美千子（留学生・国際交流センター教員）

#### (2) プログラム（敬称略）

講演1 「国費外国人留学生制度と日韓共同理工系学部留学生について」

木谷 慎一（文部科学省高等教育局学生・留学生課留学生交流室国費留学生係長）

講演2 「2015年以後の『韓・日共同理工系学部留学生』選抜方式の変更について」

金 次守（大韓民国 国立国際教育院 教育研究士）

講演3 「2014年第2次第5期生韓国予備教育の現状報告」

金 重燮（大韓民国 慶熙大学校国際教育院院長）

通訳：李 美静（大韓民国 慶熙大学校国際教育院）

全体討議「日韓プログラム事業の課題について考える」

#### (3) 主な協議事項及び報告事項

- ・予備教育期間中の就学状況が不振な学生への対応として、成績管理基準を設けて修了要件を満たさない場合には学部教育課程への進学を許可しないことにしている大学が複数あることが報告された。
- ・学部入学後に論理的な思考ができずに単位を落とす学生が多いので、韓国での予備教育段階での教育方法と選抜試験のあり方を見直す必要があるという意見が出された。
- ・これまで配置がほとんどない大学においては、配置された1～2名の学生のためのプログラムを維持する負担が大きいことから、この事業への参加を取りやめたいといった意見が出された。
- ・4月にソウルで行われた説明会には日本から3大学が参加したものの、保護者の関心が選抜方法に関する変更点に集中してしまった結果、大学紹介に関する十分な場を設けることができなかったことが報告された。
- ・第3期での文系学部への拡大については、今後、検討していくことが報告された。

（鎌田 記）

### 6.2 平成26年度日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議

#### (1) 実施概要

日 時：平成26年11月7日（金）

会 場：千里阪急ホテル「樹林の間」出席大学：50大学

主 催：大阪大学

出席機関・大学等：文部科学省・日本学生支援機構・50大学

#### (2) 議事

##### 1) 留学生交流一現状と今後の政策の方向性

##### (1) 留学にかかる現状データ

##### ①外国人留学生の受入れ

②日本人学生の海外留学

- (2) 留学生政策の動向について
- (3) 留学生の双方向交流に係る施策（平成 27 年度概算要求等）
- (4) 日本語・日本文化研修留学生制度について

①概要

②日本語・日本文化研修留学生採用状況

③今後の予定 帰国留学生へのフォローアップ

- 2) 日本語・日本文化教育研修共同利用拠点事業について
- 3) 日本語・日本文化研修留学生についての質疑応答

以下のような案件についての質疑応答や事例紹介がなされた。

- ・学生の多様化への対応、課外活動にかかる費用、大使館推薦と大学推薦の学生の受け入れ、
- ・帰国留学生（日研生）へのフォローアップ実施など

(3) 所感

- ・日研生の研究テーマの多様化がかなり進んでいることを実感した。「文化」の意味するところどこまでとするかは学生の選考基準に大いに関係するところであり、受け入れ体制にも関わるので慎重に、しかし柔軟に検討してほしいと思った。
- ・学生の多様化に対して行われている各大学の試みは、本学と共通するもの、参考にしたいと思うものの両方があった。
- ・大使館推薦の学生受け入れ基準を厳しくするという今後の方針については、本学の近年の状況からも確かにその必要があると感じた。

(梅木 記)

## 6.3 全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議

### (1) 実施概要

日 時：平成 26 年 11 月 7 日（金）

場 所：チサンホテル&コンファレンスセンター新潟

主催大学：新潟大学

本学参加者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

中田 多美（留学生・国際交流課長）

### (2) プログラム（敬称略）

講 演：「留学生交流推進を通しての大学改革」古城 紀雄（大阪大学名誉教授）

議 事：1) 文部科学省所管事項説明

- 2) 独立行政法人日本学生支援機構事業説明
- 3) 公益財団法人日本国際教育支援協会事業説明
- 4) 協議事項
- 5) 次期当番大学について
- 6) 連絡・その他

(横田 記)



## 6.4 国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会

### (1) 実施概要

日 時：平成 26 年 12 月 11 日（木）～ 12 月 12 日（金）

場 所：ホテルニュー長崎、長崎大学

主催大学：長崎大学

テーマ：「グローバル化の推進に向けて」

本学参加者：中田 多美（留学生・国際交流課長）

### (2) プログラム（敬称略）

基調講演：「虎飛ぶ怪鳥（？）の熱き思い－医療ビジネスと国際展開－」

松本 謙一（サクラグローバルホールディング株式会社代表取締役会長／一般社団法人日本医療機器工業会理事長）

文部科学省・法務省からの施策説明：

1) 教育分野における国際戦略について

今里 譲（文部科学省大臣官房国際課長）

2) グローバル人材育成と大学の国際化関係施策について

松本 英登（文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長）

3) 科学技術力の強化と大学の国際化

坂口 昭一郎（文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術戦略官（国際担当））

講 演：

1) 九州グローバル産業人材協議会の取組み

松谷 昭一（経済産業省九州経済産業局国際部投資交流推進課長）

2) 県内企業の国際展開と現状と課題

山下 淳司（十八銀行ソリューション推進部業務役（アジアデスク担当））

（留学生・国際交流課）

## 6.5 平成 26 年度第 2 回国立大学法人留学生指導研究協議会 兼 第 42 回大阪大学留学生教育・支援協議会

### (1) 実施概要

日 時：平成 27 年 2 月 5 日（木）

場 所：大阪大学吹田キャンパス、銀杏会館 3 階阪急電鉄・三和銀行ホール

主催大学：大阪大学

本学参加者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）

### (2) プログラム（敬称略）

1) 留学生受け入れに関する施策 …………… 文部科学省高等教育局学生・留学生課

2) 事例紹介

(1) 留学生との交流プログラムを通してつながる地域と大阪大学

安藤 綾子（公益財団法人とよなか国際交流協会・世話人会）

魚崎 典子（大阪大学国際教育交流センター・特任准教授）

村田いづみ、段家 恭子（大阪大学国際教育交流センター留学生交流情報室・特任職員）

- (2) 留学生宿舎から真の国際学生宿舎へ  
阿部 仁（一橋大学国際教育センター留学生・海外留学相談室室長・准教授）
- 3) 分科会「原点から考える留学生受け入れの意義？地域と住環境における取組から？」
  - (1) 地域にとっての留学生との交流の意義  
中山亜紀子（佐賀大学全学教育機構・准教授）
  - (2) 地域との交流プログラムをコーディネートする大学にとっての意義  
藤田 糸子（京都大学大学院人間・環境学研究科・講師）
  - (3) 留学生と日本人など一般学生の混住寮における交流の意義  
池田 裕（電気通信大学国際交流センター・教授）
- 4) 各分科会からの報告と全体討論

（横田 記）

## 6.6 国立大学法人国際協力関係センター長等会議

### (1) 実施概要

- 日 時：平成 27 年 3 月 6 日（金）
- 場 所：文部科学省講堂
- 主 催：文部科学省大臣官房国際課
- 本学参加者：横田 信三（留学生・国際交流センター長）  
手塚 健郎（学務部長）

### (2) プログラム（敬称略）

#### 議事

- 1) 国際協力に係わる最近の動向及び大学等の課題  
佐藤 兆昭（文部科学省大臣官房国際課・政策情報分析官）
- 2) JICA 事業の最新状況
  - ① JICA 事業の最新状況：大学との連携について（JICA 国内事業部）
  - ② JICA の高等教育セクター支援概要  
上田 大輔（独立行政法人国際協力機構人間開発部）
- 3) 大学における国際協力に係わる問題点及び解決策
  - ① アンケート結果概要（文部科学省大臣官房国際課）
  - ② 国際協力の取組みと帯広：JICA 協力隊連携事業（国立大学法人帯広畜産大学）
  - ③ 山口大学における国際協力に関する取組み事例  
富本 幾（国立大学法人山口大学・副学長補佐）
  - ④ 名古屋大学における国際協力について（国立大学法人名古屋大学）
  - ⑤ 九州大学の国際協力事業の紹介  
渡邊公一郎（国立大学法人九州大学・副理事／国際交流推進室長）
  - ⑥ 全体意見交換
- 4) その他
  - ① 日本語パートナーズ派遣事業について（国際交流基金アジアセンター）

（横田 記）

### Ⅲ 教員個人活動実績





## 活動実績：横田 信三

### 1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	樹木の病原菌に対する防御機構の解明	カバノアナタ菌に感染したシラカンバ幼植物体に生成する特異的タンパク質のプロテオーム解析
		アゼライン酸処理したシラカンバ幼植物体の各器官に生成する特異的タンパク質のプロテオーム解析
		カバノアナタ菌に感染したシラカンバ幼植物体に生成する特異的ペルオキシダーゼ及びフェノール性化合物のMALDI/TOF/MSイメージング解析
2	木質系バイオマスの有効利用に関する研究	数種の食用きのこ廃菌床からのブタノール生産に関する研究
		マツノカタワタケが生産する菌体外セルラーゼの精製に関する研究
		マツノカタワタケが生産する菌体外タンパク質のプロテオーム解析

### 2. 研究活動および成果

#### 2-1. 発表論文・著書

	著者名	論文名・著書名	掲載雑誌等, または出版社	巻・号, 頁	年月
1	倉持海音, 相蘇春菜, サピット・ディロクスムブン, 田邊 純, 大島潤一, 石栗 太, 高島有哉, 飯塚和也, 横田信三, 逢沢峰昭, 大久保達弘	タイ東北部に植栽された5年生 <i>Eucalyptus camaldulensis</i> の成長とパルプ特性に関連した木材性質の家系間変異	森林遺伝育種	3, 146-152	2014
2	Hiraiwa T., Aiso H., Ishiguri F., Takashima Y., Iizuka K., Yokota S.	Anatomy and chemical composition of <i>Liriodendron tulipifera</i> stems inclined at different angles	IAWA Journal	35(4), 463-475	2014
3	Wahyudi I., Ishiguri F., Aiso H., Istikowati W.T., Sutiya B., Takashima Y., Ohkubo T., Iizuka K., Yokota S.	Anatomical characteristics and wood properties of <i>Melaleuca leucadendron</i> naturally growing in secondary forest in Indonesia	Australian Forestry	77(3-4), 168-172	2014
4	Aiso H., Ishiguri F., Takashima Y., Iizuka K., Yokota S.	Reaction wood anatomy in a vesselless angiosperm <i>Sarcandra glabra</i>	IAWA Journal	35(2), 116-126	2014
5	Istikowati W.T., Ishiguri F., Aiso H., Hidayati F., Tanabe J., Iizuka K., Sutiya B., Wahyudi I., Yokota S.	Physical and mechanical properties of woods from three native fast-growing species in a secondary forest in South Kalimantan, Indonesia	Forest Products Journal	64(1/2), 48-54	2014
6	石栗 太, 嶋原 聖, 亀山雄揮, 大野英克, 大島潤一, 高島有哉, 飯塚和也, 横田信三, 吉澤伸夫	異なる年輪数で構成されたスギ柱材の実大曲げ性能と木材性質の関係	木材工業	69(6), 242-246	2014
7	Irawati D., Sutapa J.P.G., Marsoem S.N., Wedatama S., Ishiguri F., Iizuka K., Yokota S.	The effect of storage time of cloud ear fungus ( <i>Auricularia polytricha</i> ) spent culture media made of three Indonesian tree species on their saccharification rate	Journal of the Japan Institute of Energy	94, 340-344	2014
8	Suzuki H., Takashima Y., Ishiguri F., Yoshizawa N., Yokota S.	Proteomic analysis of responsive proteins induced in Japanese birch plantlet treated with salicylic acid	Proteomes	2, 323-340	2014
9	Ueda C., Takashima Y., Ishiguri F., Iizuka K., Yoshizawa N., Yokota S.	Ozone oxidation pretreatment for enzymatic saccharification of spent culture media after <i>Lentinula edodes</i> cultivation	Journal of Wood Science	61(1), 65-69	2015

## 2-2. 学会発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集、頁	年月
1	Ichikawa T., Ishiguri F., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Proteomic analysis of the specific proteins produced in each organ of Japanese birch plantlet treated with azelaic acid	XVI International Congress on Molecular Plant-Microbe Interactions	XVI International Congress on Molecular Plant-Microbe Interactions Abstracts, P176	2014.7
2	市川拓朗、石栗 太、飯塚和也、 <u>横田信三</u>	アゼライン酸処理をしたシラカンバ幼植物体 No.8 の各器官に生成する特異的タンパク質の同定	第 32 回日本植物細胞分子生物学会（盛岡）大会・シンポジウム 大会・シンポジウム	第 32 回日本植物細胞分子生物学会（盛岡）大会・シンポジウム講演要旨集、137	2014.8
3	宮内 優、吉永新、上高原 浩、石栗太、飯塚和也、 <u>横田信三</u>	カバノアナタケ菌 IO-U1 株に感染したシラカンバ幼植物体 No.8 に発現するペルオキシダーゼ活性およびフェノール性化合物の組織化学的観察	第 32 回日本植物細胞分子生物学会（盛岡）大会・シンポジウム 大会・シンポジウム	第 32 回日本植物細胞分子生物学会（盛岡）大会・シンポジウム講演要旨集、137	2014.8
4	Miyauchi Y., Yoshinaga A., Kamitakahara H., Ishiguri F., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Distribution of the specific phenolics produced in the tissue of Japanese birch plant infected with a canker-rot fungus <i>Inonotus obliquus</i>	XXVIIth International Conference on Polyphenols & 8th Tannin Conference	ICP2014 Nagoya Polyphenols Communications 2014, 333	2014.9
5	Irawati D., Higeta S., Wedatama S., Sutapa J.P.G., Ishiguri F., <u>Yokota S.</u>	Bio-energy properties of tree branch from several species planted in Indonesia	International Symposium on Wood Science and Technology 2015	International Symposium on Wood Science and Technology 2015 Abstract Book, 7BR-O14	2015.3
6	Ichikawa T., Ishiguri F., Iizuka K., <u>Yokota S.</u>	Identification of specific proteins produced in each organ of Japanese birch plantlet treated with azelaic acid	International Symposium on Wood Science and Technology 2015	International Symposium on Wood Science and Technology 2015 Abstract Book, 5FS-P03	2015.3
7	Aiso H., Ishiguri F., Iizuka K., Shimizu J., Ohshima J., <u>Yokota S.</u>	Reaction wood anatomy and lignin distribution in a vessel-less angiosperm <i>Tetracentron sinense</i>	International Symposium on Wood Science and Technology 2015	International Symposium on Wood Science and Technology 2015 Abstract Book, 5FS-P12	2015.3
8	Iizuka K., Ohshima J., Ishiguri F., Aizawa M., Ohkubo T., <u>Yokota S.</u>	Relationship between radioactive cesium concentration and color of heartwood in sugi ( <i>Cryptomeria japonica</i> D. Don) affected by fallout due to the Fukushima Dai-ichi nuclear power plant accident	International Symposium on Wood Science and Technology 2015	International Symposium on Wood Science and Technology 2015 Abstract Book, 5FS-P24	2015.3
9	Ohshima J., Iizuka K., Ishiguri F., <u>Yokota S.</u> , Ona T.	Relationship between various extracted basic densities and cell morphology in Eucalyptus	International Symposium on Wood Science and Technology 2015	International Symposium on Wood Science and Technology 2015 Abstract Book, 5FS-P25	2015.3
10	相蘇春菜、田中仕紗、石栗 太、大島潤一、飯塚和也、 <u>横田信三</u>	コナラあて材形成に伴う木材性質および化学成分の変化	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 134	2015.3
11	大島潤一、安達広大、飯塚和也、石栗 太、 <u>横田信三</u> 、小名俊博	ユーカリにおける細胞形態の樹幹内変異（Ⅲ）-構成要素比率の標準値を示す位置について-	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学会大会 研究発表要旨集, 139	2015.3

12	Istikowati W.T., Wahyudi I., Sutiya B., Aiso H., Ishiguri F., Ohshima J., Iizuka K., Yokota S.	Anatomical characteristics of wood from three native fast- growing species in a secondary forest in South Kalimantan, Indonesia	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学 会大会 研究発表要 旨集, 140	2015.3
13	Prasetyo A., Aiso H., Tanabe J., Hidayati F., Takashima Y., Endo R., Ishiguri F., Ohshima J., Iizuka K., Yokota S.	Mechanical properties of keyaki ( <i>Zelkova serrata</i> ) trees from eight half-sib families	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学 会大会 研究発表要 旨集, 140	2015.3
14	Pertiwi Y.A.B., Marsoem S.N., Aiso H., Ishiguri F., Ohshima J., Iizuka K., Yokota S.	Physical and mechanical properties of jabon ( <i>Antocephalus cadamba</i> (Roxb.) Miq.) from Probolinggo, East Java, Indonesia	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学 会大会 研究発表要 旨集, 141	2015.3
15	田邊 純、田村 明、 佐藤佳太、石栗 太、 大島潤一、飯塚和也、 横田信三	アカエゾマツの曲げ性能に及 ぼす密度とマイクロフィブリル 傾角の影響	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学 会大会 研究発表要 旨集, 142	2015.3
16	Sunardi, Nakamura A., Ichikawa T., Ishiguri F., Ohshima J., Iizuka K., Yokota S.	Protein profiles and cellulose activities produced by <i>Porodaedalea pini</i>	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学 会大会 研究発表要 旨集, 194	2015.3
17	上田智聡、山内隆弘、 大島潤一、石栗 太、 飯塚和也、横田信三	シイタケ 2 菌株菌床栽培中の 培養浸出液および上面水にお ける菌体外タンパク質のプロ テオーム解析	第 65 回日本木材学会 大会	第 65 回日本木材学 会大会 研究発表要 旨集, 194	2015.3

### 3. 教育活動

#### 3-1. 講義

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年	単位数	備 考
1	ノーベル化学賞周辺の化学	後期	基盤教育	2	
2	森林科学論Ⅱ	後期	農学部・1年生	2	分担 (2名で担当)
3	国際森林科学論	前期	農学部・2年生	2	分担 (6名で担当)
4	林産学実験	後期	農学部・2年生	1	分担 (2名で担当)
5	森林基礎化学	前期	農学部・1年生	2	
6	森林化学	前期	農学部・2年生	2	
7	森林資源利用学	後期	農学部・3年生	2	
8	樹木組織培養論	前期	農学部・3年生	2	
9	森林化学実験	前期	農学部・3年生	1	
10	森林資源利用学実習	後期	農学部・3年生	1	分担 (2名で担当)
11	特別講義Ⅰ	後期	農学部・3年生	1	分担 (3名で担当)
12	特別講義Ⅱ	前期	農学部・4年生	1	分担 (3名で担当)
13	卒業論文	通年	農学部・4年生	6	
14	森林資源利用学特論	後期	農学研究科	2	
15	樹木生化学特論	前期	農学研究科	2	
16	林産化学特論	後期	農学研究科	2	
17	森林科学特別実験・演習Ⅰ	通年	農学研究科	2	
18	森林科学特別実験・演習Ⅱ	通年	農学研究科	2	
19	森林科学特別研究Ⅰ	通年	農学研究科	5	
20	森林科学特別研究Ⅱ	通年	農学研究科	5	
21	外国人留学生特別セミナーⅠ	後期	連合農学研究科	0.5	英語による授業

22	森林バイオマス学特論	後期	連合農学研究科	0.5	分担 (4名で担当)
23	森林資源物質科学合同セミナー	前期	連合農学研究科	0.5	分担 (8名で担当)
24	森林資源物質科学特別演習	通年	連合農学研究科	2	
25	森林資源物質科学特別研究	通年	連合農学研究科	6	

### 3-2. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	伊藤 柚子	タンニン塗料による活性酸素分解能の定量化に関する検討
2	北澤 俊	シイタケ及びナメコ栽培廃菌床のブタノール発酵
3	中村 彩奈	マツノカタワタケが生成する菌体外 $\beta$ -グルコシダーゼおよび菌体外タンパク質のプロテオーム解析
4	福田慎一郎	カバノアナタケ菌 IO-U1 株に感染したシラカンバ幼植物体 No.8 におけるフェノール性化合物およびアクチン繊維のイメージング解析

### 3-3. 大学院生論文指導

	学年	氏名	論文題目
修士課程	主指導	M2 市川拓朗	Proteome analysis of the specific proteins produced in each organ of the Japanese white birch plantlet No.8 treated with azelaic acid
	主指導	M2 宮内 優	Distribution of the specific peroxidase and phenolic compounds within the tissue of Japanese birch ( <i>Betula platyphylla</i> Sukaczew var. <i>japonica</i> (Miq.) H. Hara) No.8 plantlet infected with <i>Inonotus obliquus</i> strain IO-U1
	副指導	M2 Agung Prasetyo	Variations of anatomical characteristics and wood properties in keyaki ( <i>Zelkova serrata</i> ) trees from 8 half-sib families
	副指導	M1 竹内僚恭	Anatomical characteristics of wood from 10 tropical tree species growing in Inodesia
博士課程	主指導	D3 Fanny Hidayati	Studies on variation of wood properties in plantation-grown teak ( <i>Tectona grandis</i> L.f.) in Indonesia
	主指導	D3 田邊 純	Variations of wood property in several Japanese <i>Picea</i> species
	主指導	D3 上田智聡	Proteome analysis of extracellular proteins from wood-based culture media for cultivation of two <i>Lentinula edodes</i> strains
	主指導	D2 Wiwin Tyas Istikowati	Evaluation of wood properties for pulp production from three lesser known fast-growing species growing in Kalimantan, Indonesia
	主指導	D1 Sunardi	Purification and characterization of extracellular cellulases from a white-rot fungus <i>Porodaedalea pini</i>
	主指導	D1 相蘇春菜	Anatomical and chemical properties of reaction wood in tropical angiosperm tree species in respect of plant evolution
	主指導	D1 Yus Andhini Bhekti Pertiwi	Anatomical characteristics, wood properties, and wood durability of a fast-growing tree species, <i>Neolamarckia cadamba</i> grown in East Java, Indonesia

### 3-4. 非常勤講師

	勤務先	科目名	期間・回数	備考
1	東京農工大学	環境資源科学特別講義Ⅱ	後期・計1回	

## 4. 研究費

### 4-1. 取得研究費

種 別	資金源・種別等	研究課題	代表者	金額（千円）	期間
科学研究費	基盤研究 C	カバノアナタケ菌に感染したシラカンバ幼植物体に生成する特異的タンパク質の画像解析	横田信三	4,000	H25.4 ～ H28.3
学外助成	受託研究費	木質系炭塗料を用いた健康向上資材等の開発	横田信三	600	H26.4 ～ H27.3
学内助成	地域共生研究開発センター・イノベーション創成部門プロジェクト F	シイタケのケミカルバイオロジーに関する研究	横田信三	600	H26.4 ～ H27.3

## 5. 学内活動

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
全学組織	学術国際委員会	H26.4 ～ H28.3	
全学組織	留学生専門委員会・委員長	H26.4 ～ H28.3	
農学部	農学部学術国際委員会・委員長	H26.4 ～ H28.3	
連合農学研究科	5号代議委員	H25.4 ～ H27.3	

## 6. 学外活動

### 6-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本木材学会	会員、木材教育委員会委員	
日本農芸化学会	会員	
日本植物細胞分子生物学会	会員	
日本質量分析学会	会員	
植物化学研究会	会員	
日本植物病理学会	会員	
日本核磁気共鳴学会	会員	
アメリカ植物病理学会	会員	
アメリカ微生物学会	会員	
アメリカ質量分析学会	会員	
アメリカ植物生物学者学会	会員	
アメリカ化学会	会員	

### 6-2. 委嘱委員

組 織	委 員 会 名	備 考
(非公開)	(非公開)	H26.4 ～ H27.3
(非公開)	(非公開)	H26.4 ～ H27.3
公益財団法人農学会	技術者教育推進委員会	

## 活動実績：梅木 由美子

### 1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	中上級レベル日本語学習者への読解指導法	上級レベル日本語学習者のための指導内容と到達目標
2	ビジネス日本語の指導法	ビジネスシーンで求められる日本語の内容について

### 2. 教育活動

#### 2-1. 講義・演習

	講義・授業名	開講部局	対象学生	単位数	備 考
前期	初級日本語補講	留学生・国際交流センター	研究留学生等	なし	
	日研生特別研究Ⅱ	留学生・国際交流センター	日本語・日本文化研修留学生	2*	担当教員2名
	日本語・日本文化Ⅱ	留学生・国際交流センター	日本語・日本文化研修留学生	2*	
	日本語アカデミックリーディングⅠ	基盤教育	学部1年生、編入生	2	2クラス
	日本語教育Ⅰ	国際学部	国際学部学生、特別聴講生	2	
	日本語教育Ⅰ演習	国際学部	国際学部学生	2	
	日本語教育特別演習	国際学部	国際学部学生	2	担当教員3名
	国際学基礎演習	国際学研究科	国際学研究科博士後期課程1年生	2	担当教員複数
後期	初級日本語補講	留学生・国際交流センター	研究留学生等	なし	
	日研生特別研究Ⅰ	日研生特別演習Ⅰ	日本語・日本文化研修留学生	2*	担当教員2名
	日本語・日本文化Ⅰ	日本語・日本文化Ⅰ	日本語・日本文化研修留学生	2*	
	日本語アカデミックリーディングⅡ	基盤教育	学部留学生、特別聴講生	1	
	日本語教育特論	国際学研究科	博士前期課程学生	2	
通年	国際学特別研究Ⅰ	国際学研究科	国際学研究科博士後期課程1年生	1	論文指導

\*留学生・国際交流センターの授業科目としての単位

#### 2-2. 論文指導等

##### 修士論文指導（国際学研究科博士前期課程）

	学年	氏名・専攻	論文題目
副指導	2	尹 立 国際交流研究専攻	外国人日本語学習者の外来語学習方略に関する研究－日本在住の中級・上級の中国語を母語とする日本語学習者の問題を中心に－

##### 博士論文指導（国際学研究科博士後期課程）

	学年	氏名・専攻	論文題目
主指導	1	張 婷婷 国際学研究専攻	1920年代の中国における俳句の翻訳とその影響



### 3. 学内活動

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
全学組織	基盤教育留学生日本語部会	H23.4～	
留学生・国際交流センター	初級日本語コーディネーター	H24.4～	
留学生・国際交流センター	日本語・日本文化研修 プログラムコーディネーター	H18.4～	
国際学部	日本語教育プログラム委員会	H24.4～	

### 4. 学外活動

#### 4-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本語教育学会	会員	
小出記念日本語教育研究会	会員	
日本テスト学会	会員	

#### 4-2. 委嘱委員

組 織	委 員 会 名	備 考
(非公開)	(非公開)	H26.4.～
(非公開)	(非公開)	H25.7～

## 活動実績：吉田 一彦

### 1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	多言語コミュニケーション学	言語運用に本来的に見られる多言語性の解明
		多言語地域のコードスイッチングとコードミキシング研究
		成功した外国語学習者の多言語使用の研究
		言語規則に関する言語事実と言語規範との関係性
		母語話者教師と現地教師との協働モデル構築
2	一般言語学	類型論・対照言語研究
		人の時間認識と時間表現に関する通言語的研究
3	言語学の哲学	実証法の確立に向けた論点の検討、研究事例分析

### 2. 研究活動および成果

#### 2-1. 発表論文・著書

	著者名	発表題名	掲載雑誌等、または出版社	巻・号、頁	年月
		なし			

#### 2-2. 学会口頭発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集、頁	年月
1	吉田一彦 高嶋幸太 鶴岡聖未	「海外日本語教育経験を研究に」②	海外日本語教育学会 第1回研究会	論文化して学会誌 に掲載予定	2014.6.14
2	吉田一彦 高嶋幸太 鶴岡聖未	「海外日本語教育経験を研究に」③	海外日本語教育学会 第2回研究会	論文化して学会誌 に掲載予定	2014.9.13
3	吉田一彦 高嶋幸太 鶴岡聖未	「海外日本語教育経験を研究に」④	海外日本語教育学会 第3回研究会	論文化して学会誌 に掲載予定	2014.12.13

#### 2-3. その他の研究活動

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	海外日本語教育学会設立に向けた準備	方法論検討、報告コーディネーション		2011年度より継続
2	多言語社会における多言語使用および外国語学習状況調査	ラオス、アイルランドとトンガにおける予備調査	2014.5.13-17 2014.9.14-9.4 2015.3.1-8	今後も継続

### 3. 教育活動

#### 3-1. 講義

	講義・授業名	前期/後期	種別・対象学年	単位数	備 考
1	多言語コミュニケーション学 A	前期	基盤教育・センター科目	2	英・日2言語による授業
2	Linguistic Typology and Language Communication	前期	国際学部・センター科目	2	英語による授業
3	日本語論述表現法 B	前期	国際学研究科・センター科目	2	博士前期課程科目

4	国際交流と日本語教育	前期	国際学研究科	2	博士前期課程科目
5	日本語教育Ⅱ演習	前期	国際学部	2	
6	日本語教育特別演習	前期	国際学部	2	4週のみ担当
7	国際学リサーチ演習	前期	国際学研究科	2	博士後期課程科目
8	多言語コミュニケーション学B	後期	共通教育・センター科目	2	英・日2言語による授業
9	日本語論述表現法A	後期	国際学研究科・センター科目	2	博士前期課程科目
10	日本語教育Ⅱ	後期	国際学部	2	
11	卒業研究準備演習	後期	国際学部	2	卒業論文研究指導
12	国際学臨地研究	通年	国際学研究科	4	博士後期課程科目
13	特別研究Ⅱ	通年	国際学研究科	2	博士論文研究指導
14	特別研究Ⅲ	通年	国際学研究科	3	博士論文研究指導
15	国際交流特別研究	通年	国際学研究科	6	修士論文研究指導
16	国際文化特別研究	通年	国際学研究科	6	修士論文研究指導
17	国際学臨地研究	通年	国際学研究科	8	博士前期課程科目
18	卒業研究	通年	国際学部	8	卒業論文研究指導

3-2. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	高橋 ひとみ	(4年) 日本人英語学習者の英語上達の実感と変容
2	佐藤 はづき	(4年) ピクトグラム考
3	塩沼 サナエ	(4年) 日本語を母語とする外国人の出生地と帰属意識
4	丹野 裕太	(4年) 新聞を利用した日本語教授活動
5	藤巻 優美	(4年) タイ人児童・生徒のコミュニケーション問題
6	金森 夏実	(3年) 未定(目上の人に向けた待遇表現の日・タイ研究)

3-3. 大学院生論文指導

		学年	氏名	論文題目
博士 後期 課程	主指導	D2	アセリ・スバゴジョエワ	進行アスペクトとテンスに関するキルギス語と日本語の対照研究
	副指導	D3	仲田和正	日本の図るべき人道的国際緊急援助政策-課題解決と戦略の構築
博士 前期 課程	主指導	M2	任 苗	「は」と「が」の教授法再考 - 中国語話者を対象として
	主指導	M2	金 双双	どんな依頼表現が日本人母語話者に失礼と感じさせないか
	主指導	M2	尹 立	外国人日本語学習者の外来語学習方略に関する研究
	主指導	M1	呉 程穂	雨の種類を表す名詞とオノマトペ、および共起関係についての日中対照研究
	主指導	M1	ハルチュニヤン・カリネ	日本人と外国人のコミュニケーション、敬語の使用問題点
	主指導	M1	郭 珺	日本語教科書に取り上げられた文化事項に関する一考察 - 中国とドイツとの比較 -
	副指導	M1	周 小琳	中国人の飲食習慣に及ぼした日本食の影響とその原因 - 生食を中心として
	副指導	M1	沈 宇萌	中国における幼児の外国教育 - 瀋陽市のバイリンガル幼稚園を中心に
副指導	M1	凌 晨	言語学習者の会話パターンから見る中国語話者と日本語話者の思考パターンの差異に起因するあつれき	
副指導	M1	LIU XIAO BIN	The Dilemma of Japanese Females After the Collapse of "Bubble Economy"	

## 3-4. 研究生研究指導

	氏名	研究題目
1	黄 曉萌	日中同形語の意味の相違のタイプと用法の研究 - 「齷齪」、「工夫」を例として
2	Ankoussou Npiga, Alexia Silva	Great Powers: Japan's international cooperation. Scholarship program- Perceptions and nature in terms of education in Gabon
3	Tanh Ty My Binh (大学院研究生)	在日ベトナム人家庭における子供の言語教育について
4	羅 霄	(後期のみ) 中国および日本の大学における英語基盤教育で生じる「言語喪失」に関する研究
5	張 微	(後期のみ) 日本語受身表現の日中比較研究について
6	羅 麗 (大学院研究生)	(後期のみ) 日本語の擬声語・擬態語の中国語への翻訳と日本語教育における扱い方

## 3-5. 出張講義・模擬授業・特別講義等

	講義・授業名	期間	種別・対象学年	備考
1	外国語を学び、マスターするって、 いったいどんなことだろうか？	2014.10.17	国際学部模擬授業、青森県立弘 前中央高校	

## 3-6. その他の指導担当

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	青年海外協力隊日本語教師集合 研修講師	“文法”を読み直すーシラバス教材 作成に生かす文法ー	2013.9.25 2015.3.18	1回5時間、合 計3回実施

## 4. 学内活動

種別	委員会・役職等	任期	備考
全学委員会	基盤教育人文科学系専門部会員		
学部委員会	非公開	2007年度より現在に至る	
	非公開	1年	
センター内	日本語・日本文化研修生カリ キュラムコーディネーター		
	広報委員長		(兼) ホームページ管理委員(日本語)
	国際交流推進部門としてのグロー バル人材育成事業関連の諸業務		

## 5. 学外活動

## 5-1. 学会活動

学会名	役職名	備考
日本語教育学会	会員	
外国語教育学会	会員	
日本認知科学会	会員	

## 5-2. 委嘱委員

組織	委員会名	備考
国際協力機構青年海外協力隊事務局	ボランティア技術顧問(日本語 教育等)	2014年度に受託開始
国際協力機構青年海外協力隊事務局	技術専門委員(日本語教育)	2007年度より現在に至る
国際協力機構 JICA ナレッジマネジメント	日本語教育分野支援委員	2014年度に受託開始



活動実績：戚 傑 (Jie Qi)

1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	多文化教育理論・方法論	日米欧における多文化教育の共通点・相違点
2	大学教育	アメリカの大学における教育理念およびカリキュラム改革
3	外国語教育の教授法	外国語習得に際しての母語・自文化の干渉プロセスに関する研究

2. 研究活動および成果

2-1. 発表論文・著書

	著者名	論文名・著書名	掲載雑誌等, または出版社	巻・号, 頁	年月
1	Jie Qi	Systems of Reason and the Politics of Schooling: School Reform and Sciences of Education in the Tradition of Thomas S. Popkewitz (Routledge International Studies in the Philosophy of Education)	Oxford/ New York: Routledge Publisher	第 11 章 「Surveillance and Normalization: Policies and Pedagogies of Japanese Language Education for Immigrant Children」 (pp.235-250) 単独執筆	H26.5

2-2. その他

	著者名	タイトル	掲載雑誌等, または出版社	巻・号, 頁	年月
1	戚 傑	大学教育の国際化を見る一視点	下野新聞新書 9 『世界を見るための 38 講』 宇都宮大学国際学部 編	142 - 146 頁	H26.5

2-3. 学会発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集, 頁	年月
1	Jie Qi	Discursive Formation: The Construction of the Problem Child (査読あり)	2014 Annual Meeting of the American Educational Research Association アメリカ, フィラデルフィア	<a href="http://convention2.allacademic.com/one/aera/aera14/index.php?cmd=Online+Program+View+Paper&amp;selected_paper_id=691019&amp;PHPSESSID=d6b606bq0ebth64vapgtvj01k2">http://convention2.allacademic.com/one/aera/aera14/index.php?cmd=Online+Program+View+Paper&amp;selected_paper_id=691019&amp;PHPSESSID=d6b606bq0ebth64vapgtvj01k2</a>	H26.4

2-4. 国際会議 座長

	発表題名	学会名等	年月
1	2014 Annual Meeting of the American Educational Research Association アメリカ, フィラデルフィア	Postcolonial Analysis on Cultural Tensions and Power in Global Education	H26.4

2-5. 国際会議 査読委員

	国際会議・海外学会誌名	年月
1	2015 Annual Meeting of the American Educational Research Association ① Division B - Curriculum Studies ② SIG-Postcolonial Studies and Education ③ SIG-Foucault and Contemporary Theory in Education	H26.7-8

2-6. その他の国際連携研究活動

	種別・形態	研究課題名	期 間	備 考
1	プロジェクト	国際化と教育	H18.4～ 現在に至る	アメリカウイスコシン大学マディソン校
2	共同研究	Systems of Reason and the Politics of Schooling: Alternatives Studies on School Reforms and Sciences of Education	H22.4～ 現在に至る	9カ国の学者による共同研究（日本、中国、アメリカ、アルゼンチン、スウェーデン、スペイン、ベルギー、ポルトガル、ルクセンブルク）
3	共同研究	Global Childhoods	H24.1～ 現在に至る	Asia-Pacific geopolitical region (Australia, Hong Kong, Japan, Korea, Malaysia, Taiwan, and Thailand)

3. 教育活動

3-1. 講義

	講義・授業名	前期/後期	種別・対象学年	単位数	備 考
1	中級聴解 A	前期	留学生センター・留学生	1	
2	漢字と漢字文化	前期	留学生センター・留学生	1	
3	短期留学生特別演習 A	前期	留学生センター・留学生	2	
4	中級聴解 B	後期	留学生センター・留学生	1	
5	中級会話 B	後期	留学生センター・留学生	1	
6	短期留学生特別演習 B	後期	留学生センター・留学生	2	
7	Japanese Communication Arts	後期	基盤教育・1～4年次 留学生/日本人学生	2	英語による講義
8	移民と多文化教育	前期	国際学部 専門教育科目	2	
9	移民と多文化教育演習	前期	国際学部 専門教育科目	2	
10	卒業研究準備演習	後期	国際学部	2	
11	多文化教育特論	前期	教育学研究科・大学院生	2	
12	グローバル化と外国人児童生徒教育	後期	教育学部/国際学部1～4年次	2	他5名
13	多文化教育論	前期	国際学研究科・博士前期課程	2	
14	Academic Writing	前期	全学の大学院生・研究生向けの Lerning+1 プログラム	2	英語による講義
15	国際学臨地研究	通年	国際学研究科・博士前期課程	8	
16	国際交流特別研究	通年	国際学研究科・博士前期課程	6	
17	国際社会特別研究	通年	国際学研究科・博士前期課程	6	
18	国際文化特別研究	通年	国際学研究科・博士前期課程	6	
19	学校教育特別研究	通年	教育学研究科	6	
20	多文化教育研究	後期	国際学研究科・博士後期課程	2	
21	国際学基礎演習	前期	国際学研究科・博士後期課程	2	
22	特別研究 I	後期	国際学研究科・博士後期課程	1	
23	特別研究 III	通年	国際学研究科・博士後期課程	3	

3-2. 高校出前授業

授 業 名	高 校 名	年 月 日
唯一性の価値・多様性の価値	鹿沼高校	H26.10.17

## 3-3. 大学院生論文指導

		学年	氏名	論文題目
1	主指導修了	D3	徐之英 (国際学研究科・博士後期課程) H26.3 学位取得	A Critical Analysis of Multicultural Education through an Investigation of Fundamental Factors of School and Social Life
2	主指導	D1	森谷亮太 (国際学研究科・博士後期課程)	Representation of Ableism in Life Stories of People with Colour Vision Disabilities of Japan: Toward Establishing "Meta-ableistic" Awareness of Colour Communication (tentative)
3	主指導修了	M2	NGUYEN VIET QUYNH CHI (国際学研究科・博士前期課程)	発展途上国におけるジェンダーと開発：スリランカにおけるサルボダヤシュラマダーナ運動と女性エンパワーメントに関するジェンダー・アプローチによる一考察
4	副指導	M2	須佐孝幸 (教育学研究科)	児童生徒に関するいじめ問題に対する取り込みの研究：特にいじめが生まれるメカニズムに着目して
5	副指導	M2	村上滯生 (教育学研究科・教員免許プログラム)	道徳授業における環境教育
6	副指導	M1	加藤ジオランデル (教育学研究科・教員免許プログラム)	ケアとしての対話：哲学カフェの実践から考える
7	審査委員	M2	洪璟 (国際学研究科・博士前期課程)	中国における NGO と企業による教育協力に関する調査研究：中国青少年発展基金会とキャノン中国のプロジェクトを事例として

## 3-4. 「宇都宮大学留学生・国際交流センター短期留学プログラム」修了レポート指導

	氏名	レポートテーマ
1	呂妍歆 (国際学部 交換留学生)	日本人にとっての甲子園
2	謝承哲 (国際学部 交換留学生)	外国人留学生の就職活動について
3	方桂飛 (国際学部 交換留学生)	現代日本語における女性用語について
4	CHAN HSINYU (国際学部 交換留学生)	日本人にとって新聞の重要性と新しい役割
5	ルオン・ハー・ミー (国際学部 交換留学生)	第二言語習得と年齢の影響
6	李思維 (国際学部 交換留学生)	『人間失格』から見る戦後日本人の喪失感と帰属感
7	ナム・ベト (国際学部 交換留学生)	日本の独特な箸食文化
8	張星 (国際学部 交換留学生)	武士道文化と日本人の自殺行為について
9	陳超慧 (国際学部学部 交換留学生)	格差社会における日本企業の労働・組織・労使関係：トヨタ自動車株式会社の管理制度を中心に
10	李聞怡 (国際学部 交換留学生)	日本語における表現の主観性について
11	王玉君 (国際学部 交換留学生)	日本にいる外国人就職状況から「グローバルゼーション」を見る
12	スックサイ・イッサダー (国際学部 交換留学生)	ジャニーズ文化について
13	馬麗萍 (国際学部 交換留学生)	日本の学校におけるいじめ問題について

## 4. 学内活動

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
留学生・国際 交流センター	中級日本語短期留学プログラムコーディネーター	H20.4～現在に至る	
	中級カリキュラムコーディネーター	H20.4～現在に至る	
	英語関連科目	H14.10～現在に至る	
学 部	非公開	H26.4～H27.3	
全 学	基盤教育人文科学系専門部会・部委員	H23.4～	

## 5. 学外活動

学 会 名	役 職 名	備 考
アメリカ教育学会	会員	
国際比較教育学会	会員	
日本教育社会学会	会員	
Reconceptualizing Early Childhood Education	会員	
Asia-Pacific Education Research Association	会員	



## 活動実績：鎌田 美千子

### 1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	第二言語としての日本語の使用及び習得に関する研究	第二言語によるパラフレーズに関する研究
2	第二言語としての日本語の教育方法及び評価に関する研究	学部留学生に対するアカデミック・ライティング教育に関する研究
3	日本語指導を必要とする児童生徒への日本語教育研究	教科学習に必要な日本語及びその支援方法に関する研究
4	日本語教員養成に関する研究	日本語教員養成に関する教育プログラムの開発

### 2. 研究活動および成果

#### 2-1. 著書

	著者名	著書名	掲載雑誌等,または出版社	巻・号, 頁	年月
1	鎌田 美千子	「日本語教育とその学び—他者への視点・ことばへの認識・パラフレーズ—」・宇都宮大学国際学部編『世界を見るための38講』	下野新聞社	113-117 頁	H26.11
2	鎌田 美千子	第二言語によるパラフレーズと日本語教育	ココ出版	全140 頁	H27. 2.

#### 2-2. 学会口頭発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集, 頁	年月
1	鎌田 美千子	JSL 児童生徒への学習支援を目的としたリライトにおける背景知識の扱いとその課題 (査読有)	異文化間教育学会	2014 年度異文化間教育学会第 35 回大会発表抄録, 106-107 頁	H26. 6.
2	鎌田 美千子	教科書のリライトにおけるパラフレーズの分析 (査読有)	International Conference on Japanese Language Education 2014	<a href="https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program">https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program</a>	H26. 7.
3	鎌田 美千子	言語景観に着目した漢字テキスト作成の実践と課題 (査読有)	日本語教育方法研究会	日本語教育方法研究会誌 No.21, vol.2, 50-51 頁	H26. 9.

#### 2-3. 講演等

	著者名	形態・発表題名	学会名等	巻・号, 頁	年月
1	鎌田 美千子	パネルディスカッション「第二言語での引用はなぜ難しいか」・第二言語としての日本語によるパラフレーズと引用	第 25 回 第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会及び筑波大学《人文社会系プロジェクト》	第 25 回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会予稿集, 18-23 頁	H26.12.

## 2.4. 国際会議出席

	会議名	開催場所	開催年月日	備考
1	International Conference on Japanese Language Education 2014	University of Technology, Sydney	H26.7.10-12	研究発表

## 2.5. 学会活動

	会議名・任務	開催場所	開催年月日	備考
1	2014 年度異文化間教育学会第 35 回大会・司会(個人発表)	同志社女子大学	H26.6.7-8	

## 2.6. その他の研究活動

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	科学研究費基盤研究 (C)	JSL 児童生徒への教科学習支援におけるパラフレーズの活用—文章理解を中心に—	H25.4.-H28.3.	研究代表者
2	科学研究費基盤研究 (C)	口頭発表時における質疑応答コミュニケーション能力を高めるための教育方法の開発	H26.4.-H30.3.	連携研究者
3	科学研究費基盤研究 (B)	大学・大学院でのキャリア形成に資する在学段階別日本語ライティング教育の開発と評価	H26.4.-H30.3.	分担研究者

## 3. 教育活動

## 3-1. 講義

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年	単位数	備考
1	アカデミック・ジャパニーズ	前期	基盤教育・1 年	1	
2	アカデミック・ジャパニーズ	前期	基盤教育・1 年	1	
3	日本語特別演習	前期	留学生・国際交流センター・1 年	—	
4	日本語アカデミック・ライティング	後期	基盤教育・1 年	1	
5	日本語アカデミック・ライティング	後期	基盤教育・1 年	1	
6	日本語アカデミック・プレゼンテーション	後期	基盤教育・1～4 年	1	
7	言語習得論	前期	基盤教育・1～4 年	2	
8	日本語教育方法論	後期	国際学部・2 年	2	
9	日本語教育方法論演習	前期	国際学部・3 年	2	
10	日本語教育特別演習	前期	国際学部・3 年	2	第 1-2 回, 第 11-15 回担当
11	グローバル化と外国人児童生徒教育	後期	国際学部・3 年 基盤教育 1～2 年	2	第 5 回, 第 6 回担当
12	卒業研究準備演習	後期	国際学部・3 年	2	
13	卒業研究	通年	国際学部・4 年	8	
14	言語教育論	前期	国際学研究科・博士前期	4	
15	国際交流特別研究	通年	国際学研究科・博士前期	6	
16	国際文化特別研究	通年	国際学研究科・博士前期	6	
17	国際社会特別研究	通年	国際学研究科・博士前期	6	
18	国際学臨地研究	通年	国際学研究科・博士前期	8	
19	言語教育研究	後期	国際学研究科・博士後期	2	

3-2. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	久慈麻巳子（4年）	年少者日本語教育における教材づくり—名詞化に焦点を当てて—
2	近藤智哉（4年）	小学校社会科教科書の分析とリライト教材の提案
3	小林正枝（3年）	未定（年少者日本語教育）

3-3. 大学院生論文指導

	種別	学年	氏名	論文題目
博士前期課程	主指導	M2	何 洋洋	構想段階に着目した日本語作文の教育方法
	副査	M2	李 学梅	中国人日本語学習者による縮約形に関する研究—理解と運用の差に着目して—
	主指導	M1	孫 文慧	リソースの活用が学習者のビリーフに与える影響
	副指導	M1	趙 美慧	日本バブル崩壊前後の産業構造の変化について

4. 研究費

4-1. 取得研究費

種別	資金源・種別等	研究課題	代表者	金額(千円)	期間
科学研究費	基盤研究(C)・代表	JSL児童生徒への教科学習支援におけるパラフレーズの活用—文章理解を中心に—	鎌田美千子	1950	H25.4. - H28.3.
科学研究費	基盤研究(B)・分担	大学・大学院でのキャリア形成に資する在学段階別日本語ライティング教育の開発と評価	村岡貴子	195	H26.4. - H27.3.
その他	国際学部国際学叢書刊行助成	第二言語によるパラフレーズと日本語教育	鎌田美千子	300	H26.4. - H27.3.

4-2. 申請研究費

種別	資金源・種別等	研究課題	代表者	金額(千円)	期間
その他	国際学部国際学叢書刊行助成	第二言語によるパラフレーズと日本語教育	鎌田美千子	600	H26.4. - H27.3.

5. 学内活動

種別	委員会・役職等	任期	備考
全学委員会	基盤教育運営会議留学生日本語部会・部会長	H23.4～現在	
	基盤教育企画委員会初期導入科目企画チーム・委員	H25.4～H27.3	
	留学生専門委員会・委員	H26.4～H28.3	
学部委員会	国際学部日本語教育プログラム運営委員会・委員	H24.4～現在	
	国際学部外国語WG・委員	H26.11～現在	
	非公開	H26.4～H27.3	
センター内	上級カリキュラムコーディネーター	H20.4～現在	
	日韓理工系学部留学生プログラムコーディネーター	H20.4～現在	
	学部留学生日本語科目	H20.4～現在	
	学部1年生日本語補講	H18.4～現在	
	シンポジウム企画委員	H24.4～H26.3	

## 6. 学外活動

## 6-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本語教育学会	会員	
専門日本語教育学会	幹事	
異文化間教育学会	会員	
第二言語習得研究会	会員	
社会言語科学会	会員	
日本語教育方法研究会	会員	
大学日本語教員養成課程研究協議会	会員	

## 6-2. 委嘱委員

組 織 等	役職・活動名等	備 考
日本語教育学会	学会誌委員会 査読協力者	
独立行政法人日本学術振興会	審査員候補者	

## 6-3. その他の学外活動（団体役職等）

組 織 等	役職・活動名等	備 考
那須塩原市国際交流協会	平成 26 年度日本語指導者養成講座講師	



## 活動実績：湯本 浩之

### 1. 研究課題

	課 題	小 課 題
1	開発教育・グローバル教育・ESD 等の歴史研究や政策研究	欧州の新教育運動や英国のワールドスタディーズに関する研究
		英国や欧州連合における開発教育・グローバル教育政策に関する研究
2	参加型学習と参加型開発との比較研究	ワークショップやファシリテーションの理論や実践に関する研究
		P R A (参加型農村調査) や P L A (参加型学習行動) に関する研究

### 2. 研究活動および成果

#### 2-1. 発表論文

	著者名	論文名・著書名	掲載雑誌等、または出版社	巻・号、頁	年月
1	湯本浩之	グローバル資本主義時代における開発教育教材「貿易ゲーム」の今日的意義と実践上の課題	『宇都宮大学留学生教育研究論集』	第5号、15-25 頁	2014 年 7 月
2	湯本浩之	「政治化する教育」を問う：シティズンシップ教育の今日的な意味と開発教育への示唆	『開発教育』開発教育協会	No. 61, 22-30 頁	2014 年 12 月

#### 2-2. 著書

	著者名	著書名	掲載雑誌等、または出版社	巻・号、頁	年月
1	湯本浩之	「持続可能な社会構築における教育の役割：“市民の形成”に向けた社会運動体としてのグローバル・ネットワークへ」『環境教育と開発教育：実践的統一への展望 ポスト 2015 の ESD へ』	筑波書房	195-210 頁	2014 年 7 月
2	湯本浩之	国際開発学会編『国際協力用語集』第 4 版（「参加型学習」や「グローバル教育」など 6 項目を執筆）	国際開発ジャーナル社		2014 年 9 月
3	湯本浩之	「開発教育を大学教育に生かす」宇都宮大学国際学部編『世界を見るための 38 講』	下野新聞社	72-77 頁	2014 年 11 月
4	湯本浩之 他 3 名	教材「Global Express 時事問題を教室へ：過激派組織による人質事件」	開発教育協会	第 19 号、全 10 頁	2015 年 2 月
5	湯本浩之	書評「田中治彦・杉村美紀共編『多文化共生社会における ESD・市民教育』」	『ソフィア』上智大学	Vol.61, No.44 333-336 頁	2015 年 3 月

#### 2-2. 学会口頭発表

	著者名	発表題名	学会名等	要旨集、頁	年月
1	湯本浩之	開発教育における「先住民民族」学習の経験と課題	日本国際教育学会 第 25 回大会	要旨、5-6 頁	2014 年 6 月

#### 2-3. その他の研究活動

	種別・形態	研究課題名	期間	備考
1	共同研究	グローバル化時代のアジアの農村社会の変容とグローバル教育の普及	2014 年度	国際学部共同研究組織（研究推進）
2	共同研究	グローバル化と開発問題研究	2014 年度	主催：開発教育協会、次年度も継続。
3	共同研究	開発教育のアーカイブ研究	2014 年度	主催：開発教育協会、次年度も継続。

### 3. 教育活動

#### 3-1. 講義

	講義・授業名	前期 / 後期	種別・対象学年	単位数	備考
1	ワークショップで学ぶ変わりゆく現代社会と私たち	前期	基盤教育	2	総合系科目・アクティブ・ラーニング科目
2	グローバル教育論	後期	国際学部	2	
3	国際キャリア開発	夏期集中	国際学部	2	合宿セミナー（8月）
4	国際キャリア実習	不定時	国際学部	2	
5	国際インターンシップ	不定時	全学科目	2	
6	Globalization and Society	夏期集中	全学科目	2	Learning+1
7	Globalization and Society	夏期集中	農学研究科	2	Advanced Learning+1
8	グローバル教育研究	前期	国際学研究科	4	

#### 3-2. とちぎグローバル人材育成プログラム共通科目

	講義・授業名	日程	分野	単位数	備考
1	Globalization and Society	9/17～19	グローバルな教養と日本の文化	2	
2	国際キャリア開発	8/9～11	キャリア形成	2	

#### 3-3. 卒業論文指導

	氏名	卒業論文題目
1	(副査) 塩沼サナエ	日本語を母語とする外国人の出生地と帰属意識

#### 3-3. 非常勤講師

	勤務先	科目名	期間・回数	備考
1	聖心女子大学文学部	ボランティア研究概論1	前期・15回	
2	早稲田大学文学学術院	ボランティアとNPO/NGO	後期・15回	

#### 3-4. 出張講義

	実施校名	講義・授業テーマ	年月	備考
1	栃木県立白楊高校	参加型体験授業「“地球にやさしい”ってどういうこと？」	2014年5月	国際学部出前授業
2	茨城県立太田第一高校	参加型体験授業「“地球にやさしい”ってどういうこと？」	2014年10月	国際学部出前授業

#### 3-5. 講演・研修

	事業名	講演・研修テーマ	期間	備考
1	栃木県・宇河地区中教 研人権教育部会研修会	参加・体験型学習で学ぶ人権問題:「わたし」の中の“排除”と“包摂”から考える	2014年8月	

## 4. 学内活動

### 4-1. 各種委員会等

種 別	委員会・役職等	任 期	備 考
全学	学務委員会・委員	2014 年度～	
全学	学生相談員	2014 年度～	
学部委員会	国際学部国際キャリア開発プログラム委員会・委員	2013 年度～	
学部委員会	国際学部外国語関連WG	2014 年度～	
学部委員会	国際学部グローバル人材育成教育WG	2014 年度～	
センター内	国際交流部門担当	2013 年度～	
その他	キャリア教育・就職支援センター会議オブザーバー	2013 年度～	

### 4-2. 学内広報

記事名	広報誌名	発行日	備考
湯本浩之「ワークショップで学ぶ『変わりゆく現代社会の中の私たち』」連載「話・聞・書・考：アクティブ・ラーニング実践レポート」	「コモンズメール(基盤教育センター・ラーニングコモンズ・ニュースレター)」第3号、2頁。	2014 年 5 月	取材・編集協力
湯本浩之「授業の外でも学びは常に成立する」特集「ラーニング・コモンズ」	「UUnow」第34号、5頁。	2014 年 7 月	取材・編集協力

## 5. 学外活動

### 5-1. 学会活動

学 会 名	役 職 名	備 考
日本社会教育学会	会員	
日本環境教育学会	会員	

### 5-2. 委嘱委員

組 織 等	役職・活動名等	備 考
公益財団法人日本 YMCA 同盟	「地球市民育成プロジェクト」リソースパーソン	
公益財団法人生協総合研究所	「アジア生協協力基金」運営委員	
公益信託今井記念海外協力基金	諮問委員	

### 5-3. その他の学外活動(団体役職等)

組 織 等	役職・委員会名等	備 考
NPO 法人開発教育協会	副代表理事	



## IV 資 料



## 1 留学生在籍状況

## (1) 留学生種別在籍者数 (2014年5月現在)

種 別	所 属	人 数	小 計
学部留学生	国際学部	23	86
	教育学部	6	
	工学部	42	
	農学部	15	
大学院留学生	国際学研究科	56	115
	教育学研究科	6	
	工学研究科	40	
	農学研究科	3	
	連合農学研究科	10	
研究生	国際学部・国際学研究科	16	20
	教育学部・教育学研究科	2	
	工学部・工学研究科	0	
	農学部・農学研究科	0	
	連合農学研究科	0	
	留学生・国際交流センター	2	
短期留学生 (交流協定校との交換留学生)		27	27
日本語・日本文化研修留学生		11	11
教員研修留学生		4	4
日韓理工系学部留学生		0	0
科目等履修生		0	0
合 計		263	263

## (2) 国別留学生数 (国数：27ヵ国)

国 名	人 数	国 名	人 数	国 名	人 数
中国	129	スリランカ	5	ミャンマー	1
マレーシア	33	インド	3	カンボジア	1
ベトナム	27	スロバキア	2	フィジー	1
韓国	16	メキシコ	2	エルサルバドル	1
インドネシア	7	バングラデシュ	2	コスタリカ	1
台湾	6	シリア	2	エジプト	1
タイ	6	イタリア	1	チュニジア	1
ラオス	6	キルギス	1	ガボン	1
モンゴル	5	アルメニア	1	アメリカ	1
				合 計	263

## 2 国際交流締結校との受け入れ・派遣状況一覧

## (1) 学生の大学間国際交流 (2014 年 3 月現在)

大学間学術交流協定校名	国名	区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	計
浙江工業大学	中国	受入	3	2	0	3	2	1	11
		派遣	1	0	0	0	0	0	1
カセサート大学	タイ	受入	1	0	2	5	2	3	13
		派遣	14	2	14	1	11	3	45
復旦大学	中国	受入	1	0	0	1	0	0	2
		派遣	0	1	1	1	0	1	4
ビクトリア大学	オーストラリア	受入	1	3	0	0	1	0	5
		派遣	2	2	2	2	2	2	12
祥明大学校	韓国	受入	4	4	2	4	4	2	20
		派遣	2	2	4	1	4	2	15
ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学	イギリス	受入	0	0	2	0	0	0	2
		派遣	2	2	2	1	0	1	8
電子科技大学	中国	受入	2	2	1	2	3	2	12
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
エアランゲン・ニュールンベルク・フリードリッヒ・アレキサンダー大学	ドイツ	受入	1	0	0	1	0	1	3
		派遣	4	3	4	4	4	4	23
浙江師範大学	中国	受入	7	5	3	4	4	4	27
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
浙江大学	中国	受入	1	3	1	2	0	0	7
		派遣	1	1	1	2	3	1	9
内蒙古農業大学	中国	受入	0	1	0	0	1	0	2
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
ボゴール農科大学	インドネシア	受入	0	1	1	4	0	0	6
		派遣	1	0	0	0	0	0	1
寧波大学	中国	受入	9	4	5	4	5	5	32
		派遣	2	4	0	0	0	0	6
国立台湾師範大学	台湾	受入	2	2	2	2	2	2	12
		派遣	2	13	2	2	2	2	23
香港大学	中国	受入	3	3	1	0	0	1	8
		派遣	2	3	1	3	3	2	14
国立政治大学	台湾	受入	2	2	1	0	1	1	7
		派遣	1	0	1	0	1	2	5
パラツキー大学	チェコ	受入	2	2	3	2	2	4	15
		派遣	2	2	2	2	2	2	12
モンゴル人文大学	モンゴル	受入	1	1	0	0	0	0	2
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
ダッカ大学	バングラディッシュ	受入	0	0	0	1	0	0	1
		派遣	0	0	1	1	0	0	2
モンゴル国立農業大学	モンゴル	受入	2	1	1	1	2	0	7
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
天安蓮庵大学	韓国	受入	0	1	0	0	0	0	1
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
ノースダコタ大学	アメリカ	受入	0	5	0	0	0	0	5
		派遣	2	2	2	1	2	0	9
オルレアン大学	フランス	受入	1	4	0	0	0	0	5
		派遣	3	3	5	3	3	2	19
アジア工科大学	タイ	受入	0	1	0	0	0	0	1
		派遣	0	0	0	0	0	0	0

全北大学校	韓国	受入	3	3	1	3	1	1	12
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
東フィンランド大学	フィンランド	受入	0	1	0	0	0	0	1
		派遣	0	0	0	※1	0	0	1
慶北大学校	韓国	受入	3	3	2	3	0	0	11
		派遣	0	0	0	0	2	1	3
トライン大学	アメリカ	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	2	2	1	2	7
アイルランド国立大学ダブリン校	アイルランド	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	※1	0	0	1
合 計		受入	49	54	28	42	30	27	230
		派遣	41	40	44	28	40	27	220

※平成24年度の東フィンランド大学及びアイルランド国立大学ダブリン校への派遣については、ダブルディグリー・プログラムによる派遣各1名である。

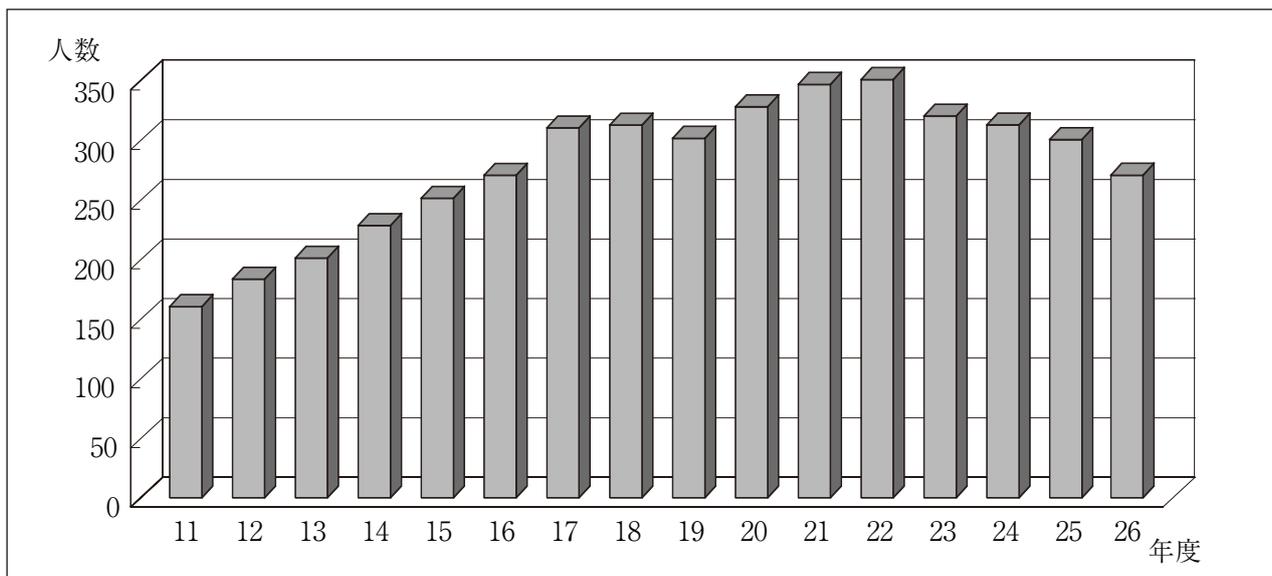
## (2) 学生の部局間国際交流（2015年3月現在）

部局間学術国際交流協定校名	国 名	区分	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	計
国立暨南国際大学（人文学院）	台湾	受入	1	1	1	2	1	1	7
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
東華大学（環境科学与工程学院）	中国	受入	2	2	0	1	0	0	5
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
龍華科技大学（工程学院，電資学院）	台湾	受入	3	3	1	0	2	0	9
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
釜慶大学校（人文社会科学大学）	韓国	受入	1	2	1	1	1	1	7
		派遣	0	0	1	0	2	0	3
イルクーツ国立言語大学 （国際事務局）	ロシア	受入	4	4	2	2	2	0	14
		派遣	1	1	0	2	0	0	4
キングモンクット工科大学トンプリー校 （生物資源工学研究科）	タイ	受入	2	1	1	0	0	0	4
		派遣	1	2	0	0	0	0	3
齊齊哈爾大学（外語学院）	中国	受入	2	2	2	3	2	2	13
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
ダマスカス大学（人文学部）	シリア	受入	0	1	1	0	0	0	2
		派遣	1	2	0	0	0	0	3
セントラル・ランカシャー大学	イギリス	受入	3	3	0	0	0	0	6
		派遣	3	3	3	0	0	0	9
ポンティフィシアカトリック大学 （人文学部・社会科学部）	ペルー	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	2	2	0	2	1	1	8
国立台北大学（人文学院）	台湾	受入	1	1	0	1	1	0	4
		派遣	0	0	0	1	1	0	2
コリマ大学（政治社会学部）	メキシコ	受入	1	0	0	0	0	0	1
		派遣	1	0	2	0	0	0	3
遼寧科技大学（機械工程与自動化学院、電子与信息工程学院、材料科学与工程学院）	中国	受入	2	0	0	1	0	1	4
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
ハノイ大学	ベトナム	受入	0	2	2	2	2	2	10
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
トリア大学（第Ⅱ哲学部）	ドイツ	受入	0	3	2	4	0	2	11
		派遣	0	0	3	3	3	1	10
華東理工大学（機械与動力工程学院）	中国	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
国立暨南国際大学（教育学院）	台湾	受入	0	0	0	0	0	0	0
		派遣	0	0	0	0	0	0	0
合 計		受入	22	25	13	17	11	9	97
		派遣	9	10	9	8	7	2	45



(3) 留学生数の推移

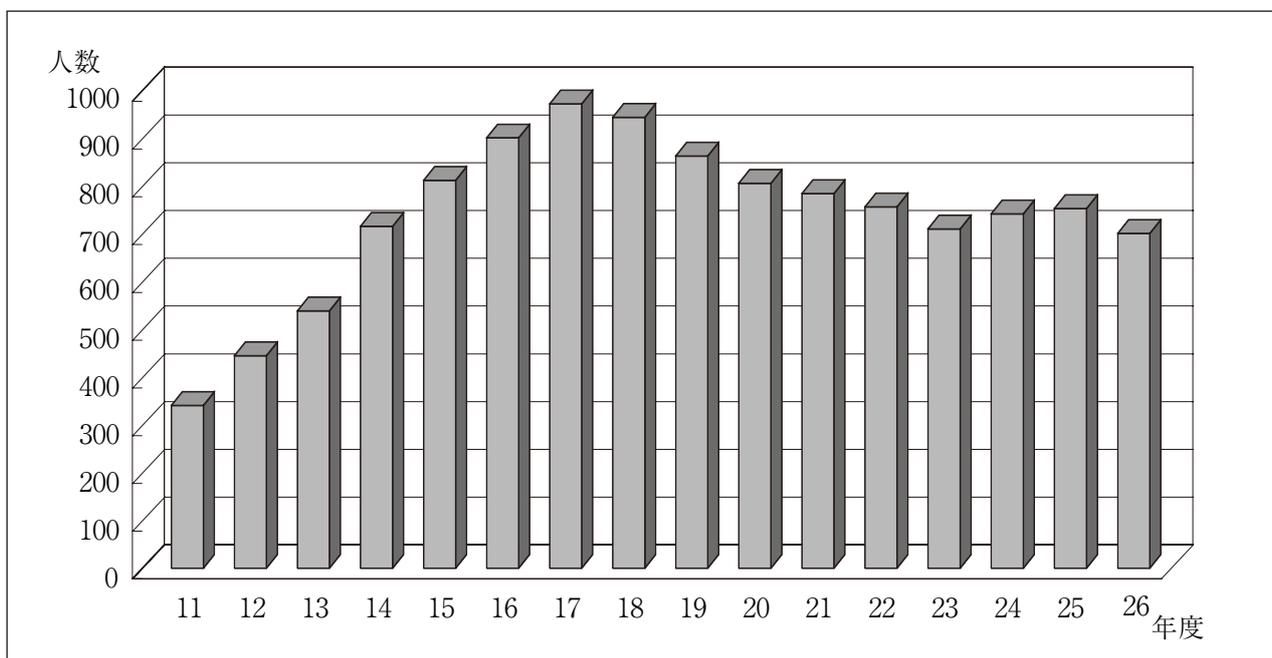
[各年 5 月 1 日現在]



年度	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
人数	153	176	193	221	244	264	303	306	295	322	340	345	313	305	284	263

(4) 栃木県内高等教育機関に在籍の外国人留学生数の推移

[各年 5 月 1 日現在]



年度	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年	24年	25年	26年
人数	318	422	518	697	795	884	956	928	846	788	768	737	693	722	739	677



### 3 留学生・国際交流センターの発行物

- (1) 『平成 26 年度日本語科目授業案内 (Course Descriptions)』
- (2) 『宇都宮大学留学生教育研究論集第 5 号 留学生・国際交流センター年報 2013 年度』 (2014 年 7 月)
- (3) 『2013 年度日本語・日本文化研修留学生研修論文集』 (2014 年 12 月)
- (4) 『平成 25 年度～平成 26 年度夏期国際インターンシップ報告書』 (2015 年 3 月)

宇都宮大学  
留学生教育研究論集 第6号  
留学生・国際交流センター年報 2014年度

発行日：平成27（2015）年7月

編集者：宇都宮大学留学生・国際交流センター  
（編集担当：湯本浩之・吉田一彦）

発行者：宇都宮大学留学生・国際交流センター  
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350  
TEL: 028-649-5099 FAX: 028-649-5115（留学生・国際交流課）  
Email: ryuugak1@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp  
URL: <http://intl.utsunomiya-u.ac.jp/index.html>

編集・印刷：株式会社アートプレス